

〒371 前橋市上泉町 664-4
前橋市教育委員会管理部文化財保護室
TEL 0272-31-9531

群馬県前橋市

堰 越 遺 跡

発掘調査報告書

昭和 63 年

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序 文

前橋の地は赤城山、榛名山を後背として、坂東大郎と呼ばれる利根川が北から南東にかけて貫流しており、四季おりおりと山の姿が変化する風光明媚な地である。

前橋地域には、700余基もの古墳が存在し、この地が古代東国文化の中心地として繁栄したことを物語っている。

こうした、すぐれた古墳文化を基盤とした律令体制の中にあっては、元総社の地が上野国の国府所在地となり、さらに国分寺僧・尼寺や山王庵寺等が造立され、上野国の政治・文化の中心地となり仏教文化の華が咲きほこった。

このたび、(株)サンドールが大友町に店舗建設設計画を前橋市・前橋市教育委員会に協議を申し入れましたが関係者協議・調整の結果、発掘調査を実施することになりました。発掘調査の結果、奈良・平安時代の堅穴住居址や溝などを中心として多数の遺構が検出され、律令制時代の村落であることが明らかとなりました。しかしながら、現状のまでの保存は無理なため記録保存の運びとなりました。

今後、地域の歴史、前橋市の歴史等を解明するための貴重な資料が得られたことと考えられます。

本報告書を発行するにあたり、多大な援助・協力をいただいた株式会社サンドール・白石勇氏に対して厚くお礼を申し上げます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

昭和63年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 関口和雄

例　　言

1. 本書は群馬県前橋市大友町三丁目2-4、2-5の店舗造成工事の施行に伴い、事前調査された堰越遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は前橋市教育委員会社会教育課のもとに組織された、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施した。
3. 発掘調査は山武考古学研究所が実施し、折原洋一が担当した。
4. 遺跡の所在地及び調査期間は次の通りである。
所在地　群馬県前橋市大友町三丁目2-4、2-5
調査期間　昭和62年5月6日～6月27日
5. 調査面積　1,500m²
6. 本書は折原洋一がまとめ、平岡和夫が総括した。整理は川島政子・根本時子の協力を得て折原洋一が行なった。
7. 発掘調査の実施および報告書の刊行までに下記の諸機関の御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。

群馬県教育委員会文化財保護課、前橋市教育委員会社会教育課、藤田プロモータス、
鶴サンドール

凡　　例

1. 住居址・井戸・土塁の縮尺は1/60、溝は1/160である。
2. 遺物は全て1/3の縮尺である。

目 次

序 文
例 言
目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 周辺の環境	3
第3章 調査の経過	5
第1節 調査の方法	5
第2節 標準土層	5
第3節 調査日誌抄	6
第4章 検出された遺構と遺物	7
第5章 ま と め	68

挿 図 目 次

1図 周辺の遺跡	2	14図 8号住居址出土遺物	19
2図 遺跡位置図	4	15図 9号住居址・出土遺物	20
3図 標準土層	5	16図 10号住居址・出土遺物	22
4図 全体図(1)	6	17図 11号住居址・出土遺物	23
5図 全体図(2)	7	18図 12号住居址・出土遺物	25
6図 1号住居址・出土遺物	9	19図 13号住居址・出土遺物	27
7図 2号住居址・出土遺物	10	20図 14号住居址・出土遺物	28
8図 3号住居址・出土遺物	12	21図 15号住居址・出土遺物	29
9図 4号住居址・出土遺物	13	22図 16号住居址	29
10図 5号住居址・出土遺物	14	23図 17号住居址	30
11図 6号住居址・出土遺物	15	24図 18号住居址・出土遺物	32
12図 7号住居址・出土遺物	17	25図 土 坪(1)	33
13図 8号住居址	18	26図 土 坪(2)	35

27図 土 塚 (3)	36	36図 土塚出土遺物 (3)	53
28図 土 塚 (4)	38	37図 土塚出土遺物 (4)	54
29図 土 塚 (5)	40	38図 1 ~ 3 · 5号溝	58
30図 土 塚 (6)	43	39図 4 · 12号溝	59
31図 土 塚 (7)	45	40図 6 · 7号溝	60
32図 土 塚 (8)	47	41図 8 · 9 · 10 · 11 · 13 · 14号溝	61
33図 土 塚 (9)	48	42図 溝出土遺物 (1)	63
34図 土塚出土遺物 (1)	49	43図 溝出土遺物 (2)	65
35図 土塚出土遺物 (2)	50	44図 井 戸 址	67

表 目 次

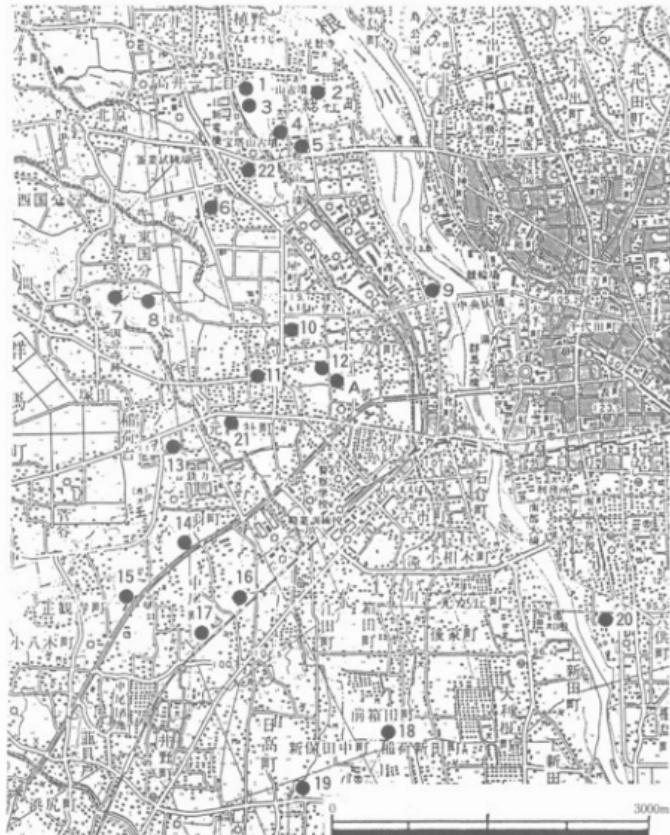
表 1 1号住居址出土遺物	8	表22 14号土塚	51
表 2 2号住居址出土遺物	8	表23 15号土塚出土遺物	52
表 3 3号住居址出土遺物	11	表24 16号土塚出土遺物	52
表 4 4号住居址出土遺物 (1)	11	表25 36号土塚出土遺物	52
表 5 4号住居址出土遺物 (2)	13	表26 39号 c 土塚出土遺物	52
表 6 5号住居址出土遺物	15	表27 39号 d 土塚出土遺物	52
表 7 6号住居址出土遺物	16	表28 39号 g 土塚出土遺物	55
表 8 7号住居址	16	表29 39号 b 土塚出土遺物	55
表 9 8号住居址出土遺物 (1)	19	表30 39号土塚周辺部遺物	55
表10 8号住居址出土遺物 (2)	20	表31 40号土塚出土遺物	56
表11 9号住居址出土遺物	21	表32 42号土塚出土遺物	56
表12 10号住居址出土遺物	24	表33 50号土塚出土遺物	57
表13 11号住居址出土遺物	24	表34 4号溝出土遺物	62
表14 12号住居址出土遺物	26	表35 5号溝出土遺物	64
表15 13号住居址出土遺物	27	表36 7号溝出土遺物	64
表16 14号住居址出土遺物	27	表37 8号溝出土遺物	64
表17 15号住居址出土遺物	28	表38 11号溝出土遺物	66
表18 18号住居址出土遺物	31	表39 12号溝出土遺物	66
表19 1号土塚	46	表40 14号溝出土遺物	66
表20 2号土塚	46	表41 15号溝出土遺物	66
表21 6号土塚	46		

第1章 調査に至る経緯

昭和62年1月7日付で本調査地の店舗建設に伴う埋蔵文化財表面調査依頼が、開発事業者である小坂武氏（4月6日付で鶴サンドール 代表取締役社長 村井誠一に変更）より提出された。1月8日に前橋市教育委員会社会教育課で表面調査を実施した結果、本調査地は、土器片散布状況が密であり、周辺に遺跡地が多いということで遺構が出る確率が非常に高いことが判明した。1月19日付で開発予定地の試掘依頼が提出され、1月28日に調査を実施した。幅1mのトレンチを南北に1本東西に2本計3本設定し確認調査を実施した結果、奈良・平安時代の住居跡13軒、同時代の溝6条、同じく土坑5基、中近世の井戸跡2基、他繩文土器片、石器等を確認、採集した。

2月5日付で開発予定地の発掘調査依頼が提出され、現場責任者である有限会社 白石建築設計事務所 白石勇氏と協議調査の上、62年5月に発掘調査を実施することとなった。なお、本遺跡の名称は、旧地籍の字名を採用し、堰越遺跡とした。

株式会社 サンドール



- A. 墓 越 遺 跡 8. 国 分 尼 寺 16. 日 高 遺 跡 (高崎市教育委調査)
 1. 二 子 山 古 墳 9. 王 山 古 墳 17. 日 高 遺 跡 (群馬県教育委調査)
 2. 遠 見 山 古 墳 10. 開 泉 極 遺 跡 18. 前 箱 田 遺 跡 (前橋市教育委調査)
 3. 愛 容 山 古 墳 11. 国 府 指 定 地 19. 新 保 遺 跡
 4. 宝 塔 山 古 墳 12. 元 級 社 明 神 遺 跡 20. 中 大 門 遺 跡
 5. 蛇 穴 山 古 墳 13. 乌 羽 遺 跡 21. 天 神 遺 跡
 6. 山 王 廟 寺 14. 中 尾 遺 跡 22. 村 東 遺 跡
 7. 国 分 寺 15. 正 観 寺 遺 跡

第1図 遺跡の位置と周辺の環境

第2章 周辺の環境

本遺跡はJR新前橋駅より北方へ約1kmの大友町に所在する。本地域は利根川右岸の前橋台地上に位置している。前橋台地は洪積統に属す台地で、浅間火山に発すると言われる前橋泥流堆積物が覆っている。また、本台地には榛名山を水源とする中小河川により開析されており、浅い谷が南北に走向する。本遺跡はこれらの中小河川の内、牛池川と滝川に挟まれた台地上立地する。周辺は起伏の少ない平坦な地形を呈すが、埋没された浅い谷が存在し、かつては浅い谷と南北に細長い微高地により構成されていたと思われる。また、本地域には水に関する地名が多く、本遺跡名である堰越を始めとして閑泉樋、樋越等が分布しており、かつてはかなり湿润な地形を呈していたと想定できる。この点に関しては当調査においても井戸址の浅いことや湧水点が検出されていることからも肯定される。調査区内の地形は確認面において西北部から東南部へとゆるやかな傾斜をもつ微高地を成している。

本遺跡の周辺には数多くの遺跡が存在する。これらの遺跡は縄文時代から平安時代に至る。しかし、縄文時代や弥生時代の遺跡はかなり希薄な地域で、本地域において遺跡が増化するのは古墳時代以後である。

古墳時代では本遺跡の東方に位置する利根川右岸沿に著名な古墳が存在する。これら古墳群は6世紀前半の王山古墳より形成され始め、総社古墳群の二子山古墳等をへて最終末期古墳である宝塔山古墳や蛇穴山古墳へと至る。これら有力な古墳に対して集落遺跡は現状のところ本地区では元総社明神遺跡、閑泉樋南遺跡が知られるが、全体として希薄な分布状況と言える。

奈良・平安時代に至ると、本遺跡の西方に上野国府が、北西方に山王庵寺、国分僧寺、国分尼寺が成立し、それとともに鳥羽、元総社明神、国分寺中間地域と言った大規模な集落遺跡が出現してくる。上野国府はその範囲について、都木丑作、近藤義雄、尾崎喜左雄、金坂清則、松島栄治、峰岸純夫、川原嘉久治各氏に諸説が上げられる。この内、金坂清則説によると本遺跡は国府城の外線部に位置することになり、それに対して松島栄治、近藤義雄両氏の説及び前橋市教育委員会による分布調査や発掘成果よると本遺跡は国府城より300m以上離れていることになる。

以上、本遺跡周辺では多数のしかも貴重な遺跡群が存在するが、中でも国府城の範囲を考える上で本遺跡の調査は重要な位置にあると言える。

参考文献 元総社明神遺跡 I 昭和57年度 前橋市教育委員会



第2図 遺跡位置図

第3章 調査の経過

第1節 調査の方法

本調査は前橋市教育委員会によって行なわれた試掘調査に基づき調査範囲を検討し、その内の店舗建設範囲の1,500m²について発掘を実施した。

調査区は4m四方のグリッドを最小単位とし、緯線（南北方向）をアルファベットで北端よりA・B・C…とし、経線（東西方向）を算用数字で西端より1・2・3…とした。各グリッドの呼称方法は北西交点のグリッド・ポイントに基づいて命名した。

第2節 標準土層

本遺構は極めて複雑な土層堆積状況を示めしている。そのため、遺構確認面は地区毎に異なり、北西部では黒色粘質土（IV層）、北東部ではC・FPを含む黒色土（III層）、南東部では茶褐色粘質土（第V層）、南西部では灰褐色粘質土層となっている。この中で、最も遺構の集中した北東部の土層を中心として各層を示めすならば次の通りである。

L=112.6m	I
	II
	III
	IV
	V
	VI

第3図 標準土層

I層 表土層。黒褐色を呈す。

II層 暗褐色土。C・FP軽石を多量に含んでおり、B軽石と推定される砂粒状の軽石も若干認められる。粘性は不良であり、締りは良好。

III層 黒色土。C・FP軽石を多量に含んでいる。粘性は不良で、締りは良好である。

IV層 黒色土。白色粒（φ2mm）を少量含む。粘性はたいへん良好で、締りも極めて良好である。

V層 茶褐色土。IV層が斑状に含まれている。粘性は極めて良好であり、締りも極めて良好である。

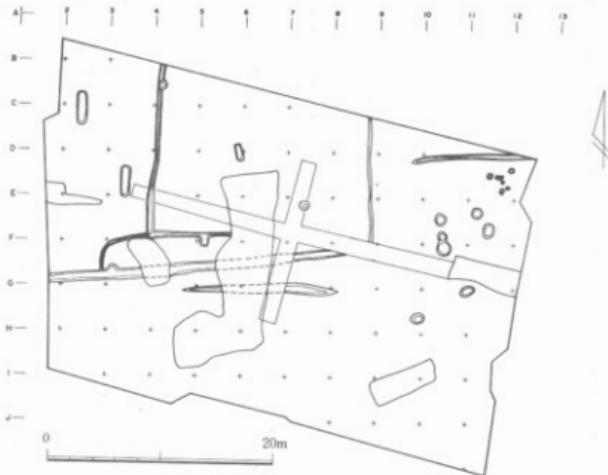
VI層 灰褐色土。砂粒を少量

含む。粘性は極めて良好であり、締りはやや良好である。

第3節 調査日誌抄

本調査は昭和62年5月6日から6月27日にわたり実施した。

- 5月6日 表土除去開始
5月10日 遺構確認を行なう。
5月20日 遺構の実測を開始する。
5月29日 住居址掘り下げに併行して土壌調査を開始する。
6月1日 未確認の土壌を多数検出する。
6月8日 溝の調査に入る。
6月17日 住居址調査終了。溝の調査に主力を置く。
6月18日 全体図作成。
6月25日 遺構の掘り下げ終了。全景撮影。
6月27日 調査終了。



第4図 全 体 図 (1)

第4章 検出された遺構と遺物

本遺跡では遺構の検出がその確認面の複雑さと覆土を切って構築される遺構群の存在ゆえに困難を極めた。確認面はその土層より4つの様相が分布的な差として認められる。北西部では黒色粘質土層が、北東部では遺構覆土と同質のC・FPを含む黒色土が、南西部では灰褐色粘質土層が、南東部では茶褐色土層が各々の確認面となっている。このような複雑な土層分布の中でも北東部に分布するC・FP軽石を含む黒色土層は遺構の覆土と全く同質なために遺構の検出および調査が困難をきたした。また、遺構の重複も著しく、多くの遺構で部分的に他の遺構により削平を受けているために形状が不明となっている。これらの状況のため、遺構によってその実体を正確な把握できなかった例もある。

検出された遺構は住居址18軒、井戸址4基、溝16条、土塙53基である。この内、井戸址および溝6条、土塙14基はその覆土中に多量の浅間山B軽石を含み、本遺跡において最終末の遺構群となっている。他の遺構はいずれも浅間山C軽石や榛名山FP軽石を含む黒色土層を覆土としている。これらの遺構群は互いに重複する例が多く、しかも各々の覆土が同質な場合が認められること等により新旧関係が不明となる例が多い。



第5図 全 体 図 (2)

1号住居址（第6図）

本住居址は調査区北西部C-4区に位置する。確認面は黒色粘質土層である。覆土はFP-C軽石を含む黒色土の単層である。本址は3・8号住居を切って構築されている。平面形は長軸3.95m、短軸2.65mの横長の長方形を呈している。床面は軟弱である。柱穴および周溝は皆無である。住居址内の北東部およびカマドの南脇に土塙が存在しているが、ともに本址自体に伴うのか不明である。北東部の土塙は径120cmの不整方形を呈し、深さ15cmの皿状の断面をもつ。カマド脇の土塙は径65cmの円形を呈し、深さ30cmの鍋底状断面をもつ。

カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。カマド自体は壁をV字平面に掘り込み構築されており、焚口部には砂質凝灰岩の切石が用いられていることから構架材も同様に砂質凝灰岩が使用されていたと想定される。煙道部は急な立ち上がりをもっている。燃焼部には砂質凝灰岩の支脚が認められる。また、カマド全体に熱の影響が少なく、焼土も少ない。

表1 1号住居址出土遺物

番号	器種	器高 （口径cm） 底径cm	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	—	— — —	一枚造り。凹面に粗い布目、凸面は綾纹の無で施す。	疊多	還元焼成	青灰色	カマド脇の土塙覆土

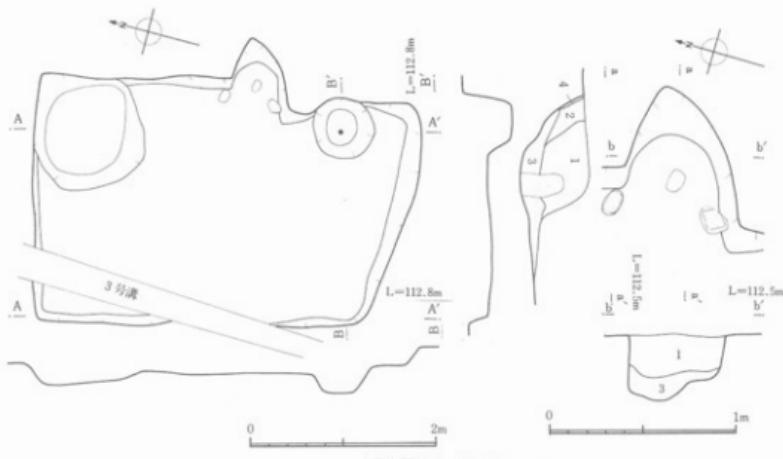
2号住居址（第7図）

本住居址は調査区中央部E-7区に位置する。確認面は黒色粘質土層である。覆土はFP-C軽石を含む黒色土の単層である。本址は9号住と重複関係をもつが、その新旧関係は不明である。さらに3号井戸址とも重複関係をもち、これは3号井戸址が新しく構築されている。また、住居址の南部および西部は試掘トレーニングにより削平されている。平面形は長軸3.9m以上、短軸3.6mの方形を呈す。床面は全体に比較的良好な締りをもち、特にカマド前面が良好な面を残している。壁は直立気味に立ち上がる。柱穴および周溝は検出されていない。住居址南東部には貯蔵穴状の土塙が認められる。この土塙は径72cmの不整円形を呈し、深さ30cmのU字形の断面をもつ。

カマドは東壁南部に位置する。壁をU字平面に掘り込み構築されている。煙道部は直立して立ち上がる。燃焼部等は加熱による焼土化等がほとんど認められない。

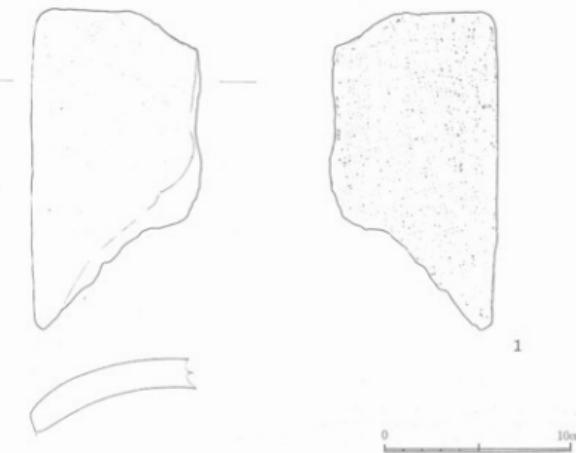
表2 2号住居址出土遺物

番号	器種	器高 （口径cm） 底径cm	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土築壇	3.3 — 12.8	口縁部から内面見込みまでヨコナデ。体部外面上部指頭による押え、体部下部ケズリ。	砂疊多	酸化	褐色	貯蔵穴内
2	直底壺	3.7 13.2 5.4	ロクロ態形。回転糸切り無調整。	砂疊多	軟質還元	黑色	床
3	鉄製釘	—	—	—	—	—	—

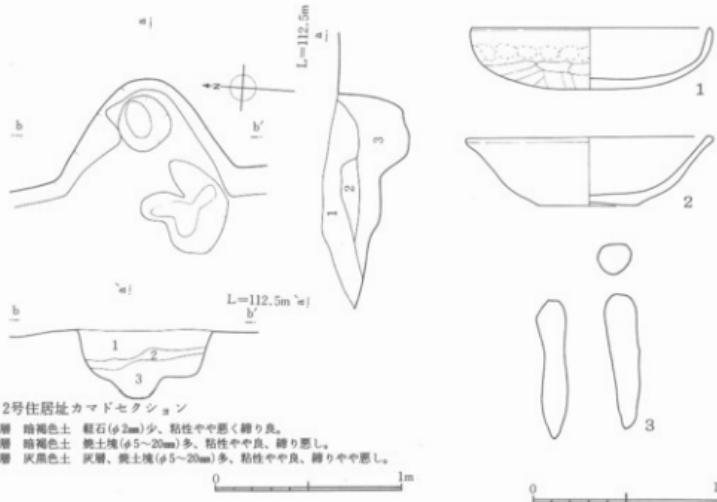


1号住居址カマドセクション

- 1層 灰褐色土 燃土ブロック(φ1~3m)少、粘性やや良、締りやや悪い。
- 2層 灰赤褐色土 燃土ブロック(φ1~10m)多、粘性悪し、締り悪し。
- 3層 灰色土 灰(黒)を多量に含む、燃土(φ5m)少、粘性悪く、締り悪し。
- 4層 赤色燃土層



第6図 1号住居址・出土遺物



第7図 2号住居址・出土遺物

3号住居址（第8図）

本住居址調査区西北部C-4区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はFP-C軽石を含む黒色土の単層である。本址は1号住居址により切られ、8号住居址を切って構築されている。平面形は1号住居址により切られているため不明な点が多いが、南北4.8mの方形を想定できる。床面は軟弱で、凹凸が激しいため、本来の床面とは考えられない。あるいは土塙等による掘削があったと推定でき、本来の床面はカマドの北西にある段がそれと思われる。住居址北東部の土塙はカマドから延びる炭層より覆われていることより住居址に本来から所属する貯蔵穴状の土塙である。この土塙は径95cmの楕円形を呈し、深さ12cmの皿状断面をもつ。壁はほぼ直立する。

カマドは東壁南部に位置する。壁をU字平面に掘り込み構築されている。煙道部は急な角度で立ち上がる。加熱による焼土化は燃焼部および煙道部とともに不鮮明である。

表3 3号住居址出土遺物

番号	器種	器高 口径 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵壺	— — 6.8	右=クロ整形。糸切り無調整。	砂疊少	泥元軟質	淡灰褐色	覆土
2	滑石製防塵車である。						

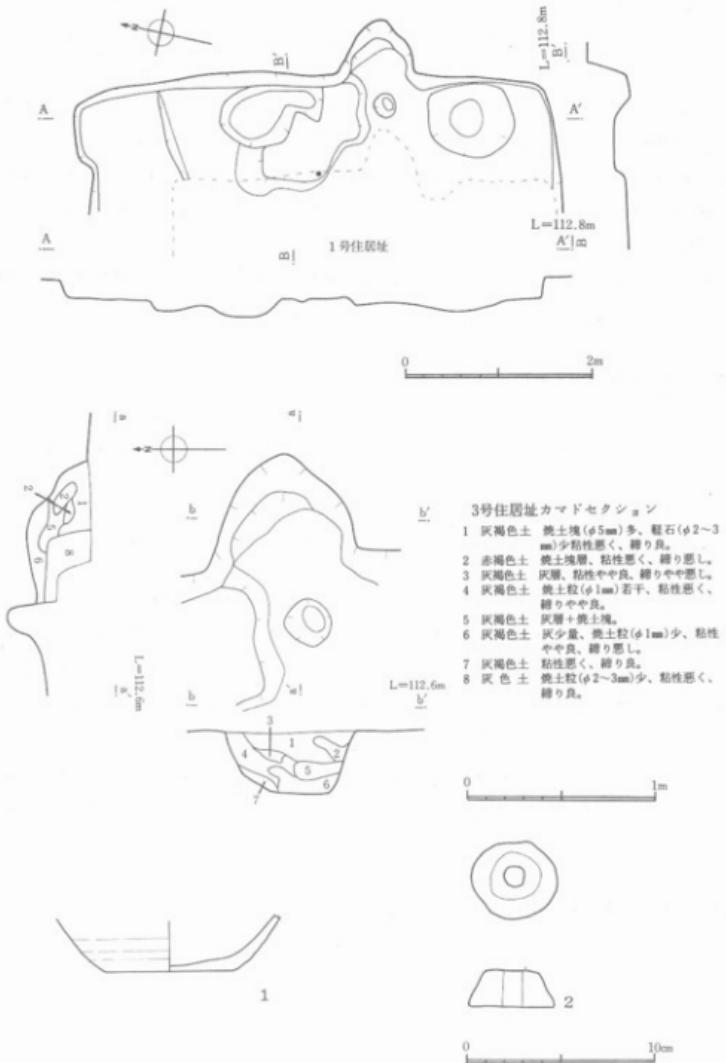
4号住居址（第9図）

本住居址は調査区北部中央のC-8区に位置する。本址の北部は未調査区のため、南部を調査するにとどまった。遺構確認面は覆土とはほとんど差の無いFP-C軽石を含む黒色土である。そのため、覆土と構築層の差を見い出すことは難しく、微妙な硬度の差等を元にして調査を実施した。平面形は東西軸長4mの方形を呈すと思われる。床面は軟弱だが平坦である。壁はほぼ直立する。周溝・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

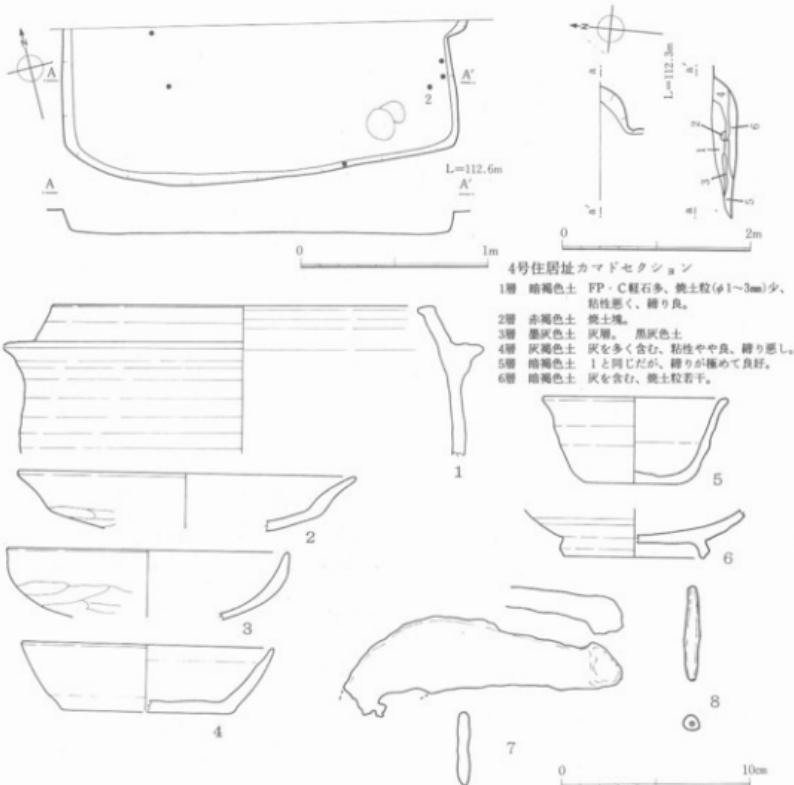
カマドは東壁に位置し、北半部は未調査区となっている。カマドは壁を掘り込み構築されているが、その詳細は不明である。また、煙道は急な立ち上がりを示し、その側壁上部のみ焼土化が認められる。

表4 4号住居址出土遺物1

番号	器種	器高 口径 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	羽釜	— 20.4	ロクロ整形。	疊少	酸化	明赤橙	覆土



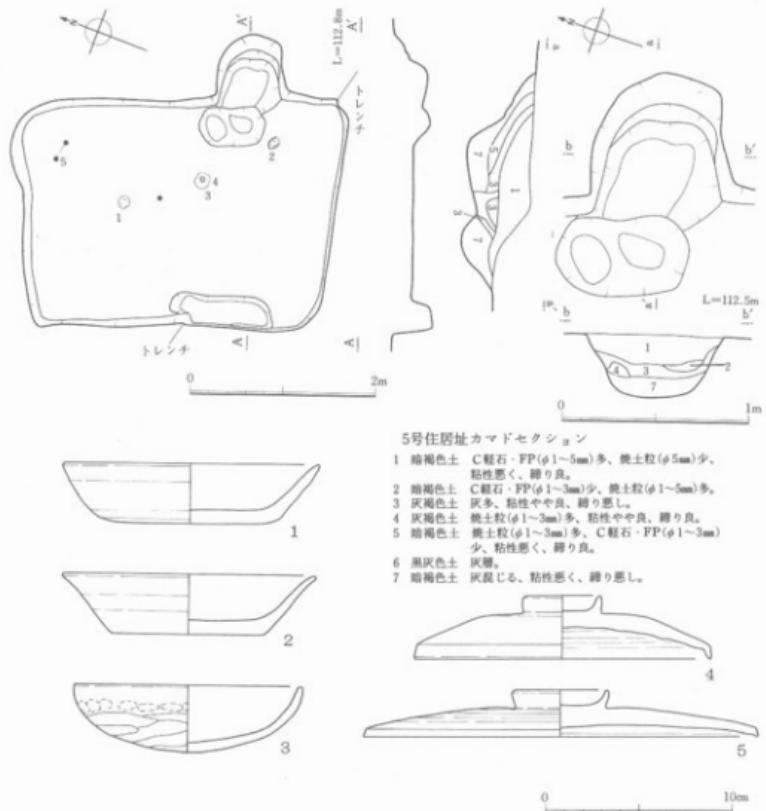
第8図 3号住居址・出土遺物



第9図 4号住居址・出土遺物

表5 4号住居址出土遺物2

番号	器種	器高～口径cm 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	土鏡環	— 17.8	口縁部から内面全面にヨコナデ。体部にケメリ。	砂礫少	酸化	淡赤橙	覆土
3	土鏡環	— 15.0	口縁部から内面全面ヨコナデ。体部にケメリ。	砂礫少	酸化	淡赤橙	覆土
4	須恵環	3.6 13.4 9.0	右口クロ整形。回転ヘラ切り。	砂礫少	還元硬質	灰色	覆土
5	土鏡環	4.6 9.6 5.2	右口クロ整形。余切り無調整。	砂礫少	酸化	明赤橙	覆土
6	灰輪環	— 7.4	右口クロ整形。体部下端回転ヘラケメリ。底部余切り後、ナデケシ。つけがけ。	密 灰白色胎	還元硬質	灰白色	覆土
7	鉄製鍵	—	—	—	—	—	—
8	土鍵	—	—	—	—	—	—



第10図 5号住居址・出土遺物

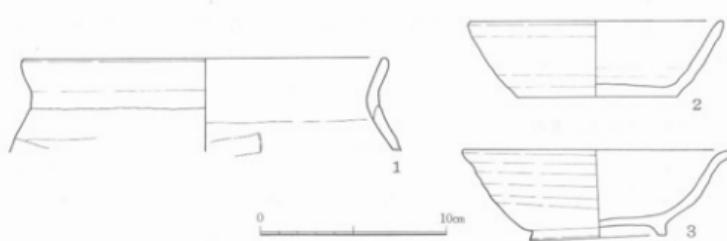
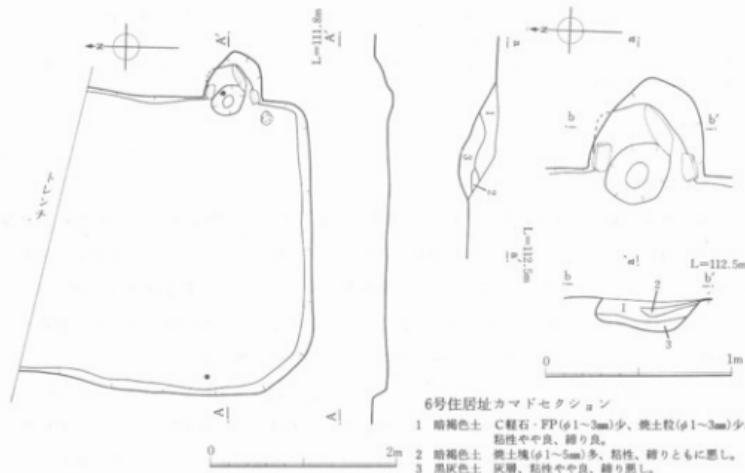
5号住居址（第10図）

本住居址は調査区中央部東寄りのE-8区に位置する。確認面は黒色粘質土およびC・FPを含む黒色土となり、覆土もまたC・FPをもつ黒色土のために調査に苦慮した。平面形は長軸長3.35m、短軸長2.4mの長方形を呈す。床面はやや縮りをもち、黒色粘質土により構成されている。周溝および柱穴は検出されていない。また、カマドの対壁に土塙が存在し、幅34cm、長さ110cm、深さ25cmの溝状を呈す。

カマドは東壁南寄りに位置し、壁をU字形に掘り込み構築されている。煙道部は下位で急に立ち上がり、中位において傾斜がゆるやかとなる。また、燃焼部前面には灰層を含む楕円形の土坑がある。

表6 5号住居址出土遺物

番号	器種	器高(口径) cm 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器環	3.2 13.6 8.0	右ロクロ整形。外表面下端回転ヘラケズリ。底部回転ヘラ切り。	礫少量	還元やや硬質	灰白色	覆土
2	須恵器環	3.2 13.4 8.2	右ロクロ整形。回転ヘラ切り。	黑色礫物多 疊若干		灰色	覆土
3	土師壺	3.6 12.2	口縁部から内面全面にコナデ。体部にケズリを施す。	砂粒多 疊少	酸化	明赤褐	覆土
4	須恵器蓋	3.4 4.2 15.8	右ロクロ整形。	疊少	内部酸化 外面還元	灰白色	覆土
5	須恵器蓋	2.5 5.0 21.2	右ロクロ整形。天井部回転ヘラケズリ。	黑色礫物若 干 疊少	還元硬質	明灰色	覆土



第11図 6号住居址・出土遺物

6号住居址（第11図）

本住居址は調査区中央部西寄りF-9区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。本址北部は試掘トレンチに削平され消失している。平面形は南北軸長は不明で、東西軸長3.2mの方形を呈す。壁はほぼ直立する。床面は軟弱で、黒色粘質土により構成されている。周溝および柱穴や土塙等の検出はない。

カマドは東壁南寄りに位置する。カマド自体は壁をU字形に掘り込み構築されており、その中に凝灰岩質砂岩を用いた天井等を構成する。燃焼部は浅い皿状の土塙を成し、あまり熱による影響は認められない。

表7 6号住居址出土遺物

番号	器種	器高(口徑cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土窯 壁	— 19.6	粘土複合層が残る。口縁部コロナデ。胴部内面ナゲを 外面ケズリを呈す。	砂粒含む	酸化	にぶい褐色	カマド内
2	演思 环	4.1 13.4 8.7	右口クロ整形。回転糸切り無調整。	砂粒少	還元やや軟質	明灰色	床
3	演思 环	5.0 14.2 7.4	右口クロ整形。回転糸切り無調整。	砂粒多	還元硬質	灰色	覆土

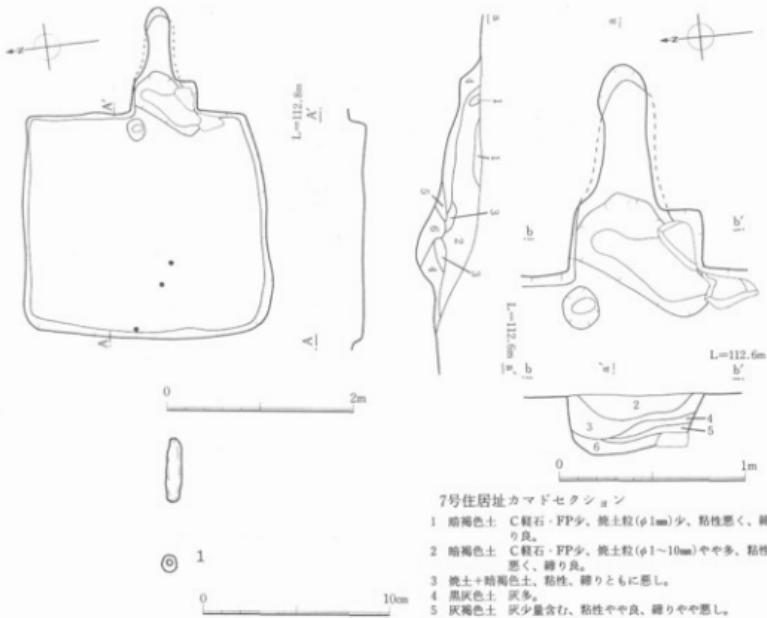
7号住居址（第12図）

本住居址は調査区北西部D-9区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土で、覆土と全く同質の土層である。そのため調査に苦慮したが、壁の硬度の差異より判断して調査を実施した。本址は北部において17号住居址と重複関係をもつが、その新旧関係は不明である。平面形は長軸2.4m、短軸2.6mのほぼ方形と言える。床面は全体的に軟弱で、黒色粘質土により構成されている。周溝・柱穴・貯蔵穴等の土塙の検出は皆無である。

カマドは東壁南部に位置している。カマド本体は壁に掘り込まれ、その中に砂質凝灰岩により天井部等を構架したと推定され、カマド南東部より袖材として使用されている。燃焼部は浅い不整形の土塙を成し、焼土層が他の住居址よりも厚く堆積していた。煙道部は細長く東方へ延びており、燃焼部との境に段差が認められる。また、その立ち上がりはかなりゆるやかな傾斜をもち、先端で急角度に変化する。煙道部の壁上部および燃焼部壁上部には焼土化した面が明確に認められる。

表8 7号住居址出土遺物

番号	器種	長さ(口径) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土窯 完形	3.4 1.0	棒状のものに巻きつけて成形している。	砂粒少	酸化	赤橙	覆土

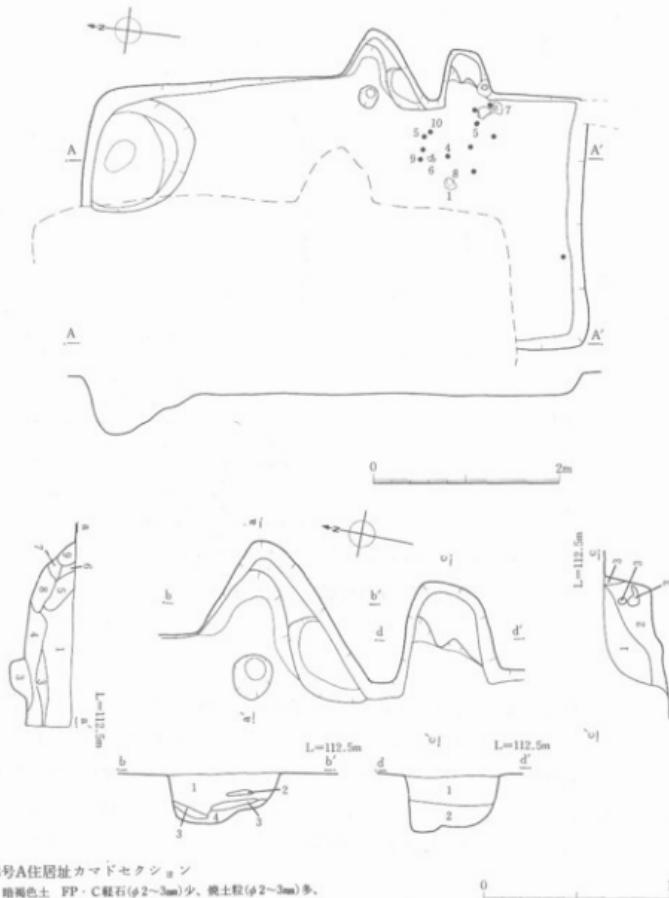


第12図 7号住居址・出土遺物

8号住居址（第13図）

本住居址は調査区北西部C-5区に位置する。確認面は黒色粘質土層で、覆土はC・FPを含む黒色土である。本址は住居址西部において1・3号住居址により切られており、最も古い住居址となる。平面形は長軸長5.4m、短軸長2.75mの方形を呈す。床面は全体に軟弱であるがほぼ平坦である。柱穴および周溝は検出されていない。また、住居址北東隅には貯蔵穴状の土塙が存在している。この土塙は径116cmの不整円形を呈しており、深さ60cmの掘鉢状を呈している。

カマドは東壁南部に2ヶ所認められている。北側のカマドは壁を三角形に掘り込み構築されている。燃焼部には浅く小さな土塙が認められ、焼土塊が検出されている。煙道はやや急な傾斜をもち立ち上がる。南側のカマドは壁をU字平面に掘り込み構築されている。燃焼部にはあまり焼土が認められなかった。煙道部は直立気味に立ち上がる。両カマドの新旧関係は不明であり、またカマドが2つ有すことより2軒の住居址が重複している可能性も考えられる。しかしながら、覆土上部ではこれと言った差異を検出できなかったため1軒の住居として漸定的に取り扱うこととした。



8号A住居址カマドセクション

1 細褐色土 FP・C 粒石($\phi 2\sim3mm$)少、鐵土粒($\phi 2\sim3mm$)多、
粘性悪く、縛り良。

2 黒灰色土 固層。

3 素 土 塙。

4 細褐色土 灰混入。鐵土粒($\phi 1\sim2mm$)少、粘性やや良、縛り
悪 L_o。

5 細褐色土 鐵土($\phi 1\sim10mm$)多、粘性悪く、縛り良。

6 細褐色土 鐵土($\phi 2\sim3mm$)少、粘性悪く、縛り良。

7 細褐色土 鐵土($\phi 2\sim3mm$)少、灰少量、粘性悪く、縛り良。

8 灰褐色土 灰々多く含む、粘性良好、縛り悪い。

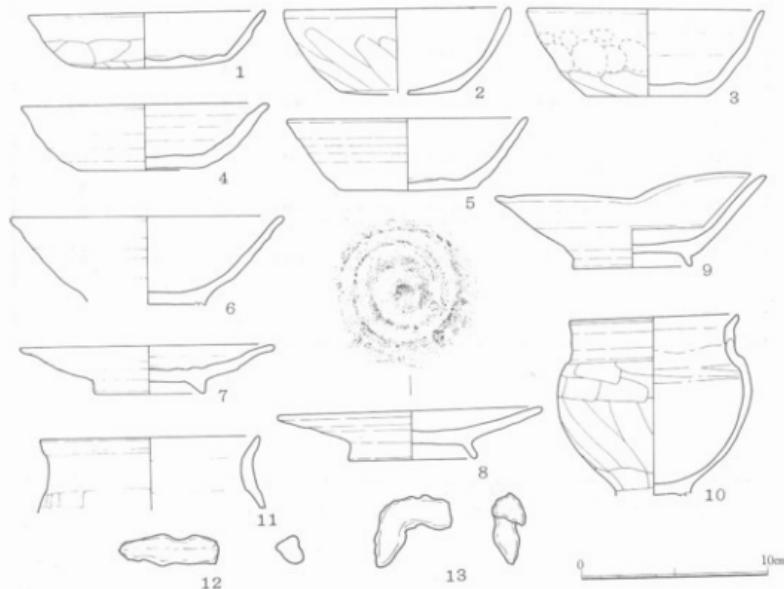
8号B住居址カマドセクション

1 細褐色土 FP・C 粒石($\phi 2\sim3mm$)多、鐵土粒($\phi 1\sim3mm$)少、
粘性悪く、縛り良。

2 細褐色土 鐵土($\phi 1\sim10mm$)灰混入、粘性やや悪く、縛り良。

3 赤褐色土 鐵土。

第13図 8号住居址



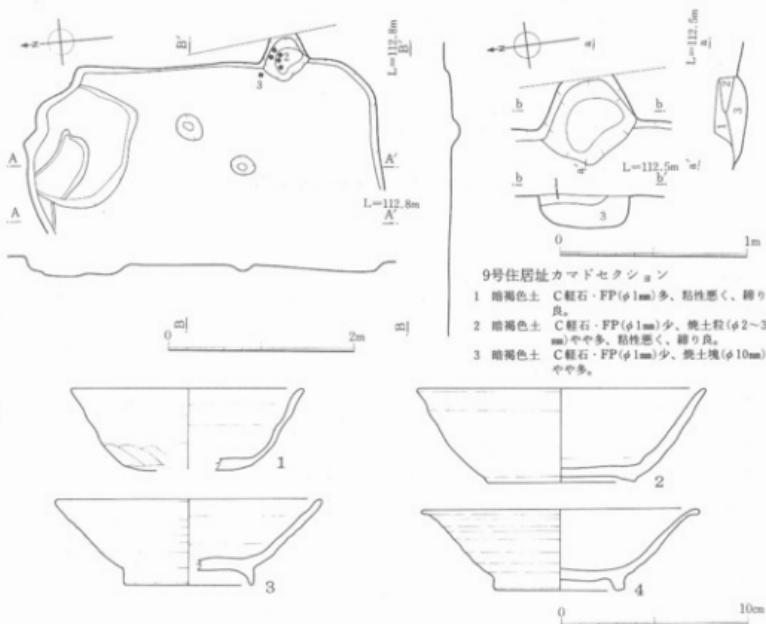
第14図 8号住居址出土遺物

表9 8号住居址出土遺物1

番号	器種	器高 口径 底径	或・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器环	3.1 12.5 —	口縁部および内面にヨコナデ。体部に右から左へのケメリ。底部に不定方向のケメリを施す。	砂礫少	酸化	にぶい赤橙色	覆土
2	土器环	4.5 12.2 4.0	口縁部および内面全面にヨコナデ。体部に左上から右下へのケメリ、底部に不定方向のケメリを施す。	赤色酸化物 を含む。	酸化	黄褐色	覆土
3	土器环	4.8 12.5 6.6	口縁部および内面全面にヨコナデ。体部外面中位に指頭による押え後、下位に右から左へのケメリ、底部に不定方向からのケメリを施す。	砂礫少	酸化	明赤橙	覆土
4	須恵环	3.5 13.1 6.0	右クロ整形。回転糸切り無調整。	硬多	還元やや軟質	紫灰色	覆土
5	須恵环	3.9 12.8 7.6	右クロ整形。回転糸切り無調整。	硬 赤色酸化物	還元硬質	灰色	覆土
6	須恵环	— 14.6	ロクロ調整。糸切り無調整。	砂粒少	還元軟質	明灰色	覆土

表10 8号住居址出土遺物2

番号	器種	器高 口径 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	須恵高台皿	2.6 13.5 5.8	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	繊若干	還元やや硬質	灰褐色	床
8	須恵高台皿	2.7 14.1 6.8	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	繊若干	還元やや硬質	灰白色	刻線を有す。 カマド
9	須恵高台环	5.0 14.3 6.4	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。口縁部を意図的に変形させている可能性がある。	砂礫多	還元やや軟質	灰白色	変形著しく片口が? 覆土
10	土師台付甕	— 9.0	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。胴部外面を左から右下へのケズリを施した後、上位を左から右へのケズリを施す。	砂礫多	酸化	暗褐色~橙	床
11	土師甕	— 11.8	口縁部内外ヨコナデ。胴部外面を左から右へのケズリ	砂礫多	酸化	暗赤橙	覆土
12	鉄製釘である。						
13	鉄製釘である。						



第15図 9号住居址・出土遺物

9号住居址（第15図）

本住居址は調査区北部中央のD-8区に位置する。本址の南部で第2号住居址と重複するけれども、その新旧関係については不明である。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FPを含む黒色土である。平面形は西部がすでに消失しているため、その詳細は不明だが、南北3.8mの方形を呈す。床面は全体的に軟弱であるが、ほぼ平坦と言える。柱穴および周溝は検出されていない。住居内の中央部付近には浅いピット状の土塹が存在し、さらに北壁にも土塹が認められる。ともに性格は不明である。北壁に接する土塹は長径130cm、短径60cmの不整形を呈し、深さ15cm程度である。あるいは本住居址と無関係の土塹かもしれない。

カマドは東壁南部に位置する。壁をU字形平面に掘り込み構築されている。燃焼部は浅い土塗状を成している。煙道部は東部端がすでに消滅していたため不明だが、残存部よりゆるやかに立ち上がる傾向が認められる。

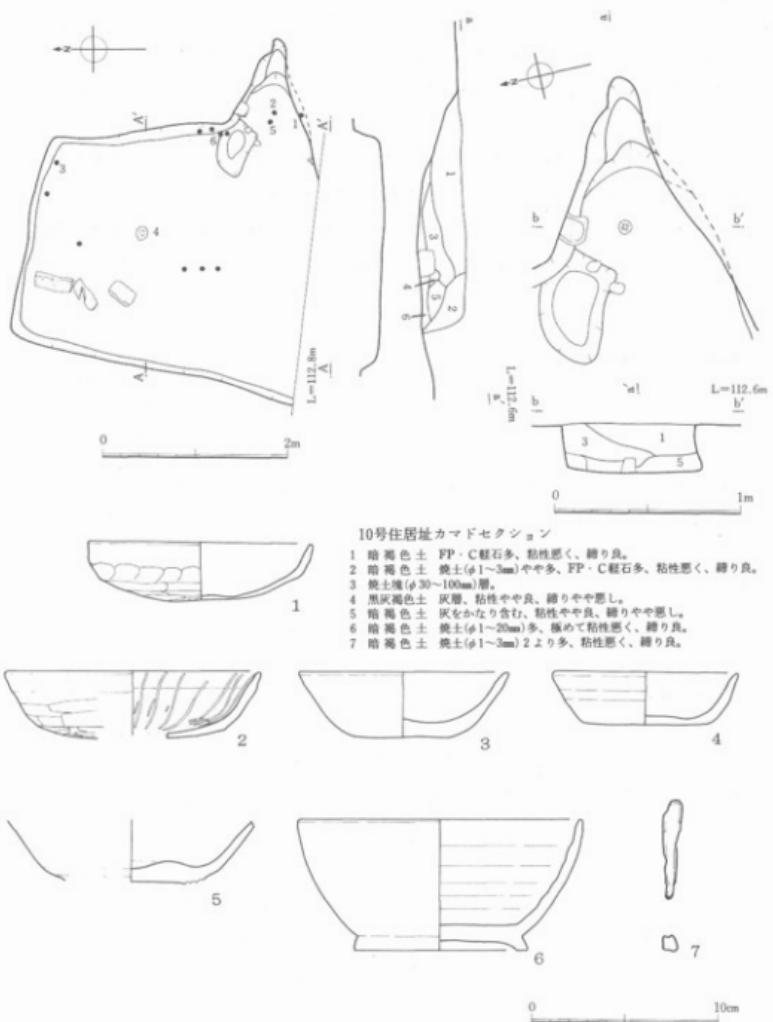
表11 9号住居址出土遺物

番号	器種	器高 口径 底径	成・整 形 の 特 徴	胎 土	燒 成	色 調	備 考
1	土 帯 环	— 12.6	口縁部から内面全面にココナゲ後、体部下端に斜位のケメリ。底部にケメリ。	赤色酸化物 多 砂礫多	酸化	明赤橙色	覆土
2	須 惠 环	5.1 15.4 8.0	右=クロ整形。回転糸切り無調整。	砂礫多 赤色酸化物 少	酸化軟質	赤橙色	カマド
3	須 惠 环	4.6 14.4 7.0	ロクロ整形。回転糸切り無調整。	砂礫少	還元軟質	明灰色	床
4	須 惠 环	4.4 14.8 6.7	ロクロ整形。回転糸切り少?	砂礫多	還元軟質	灰白色	覆土

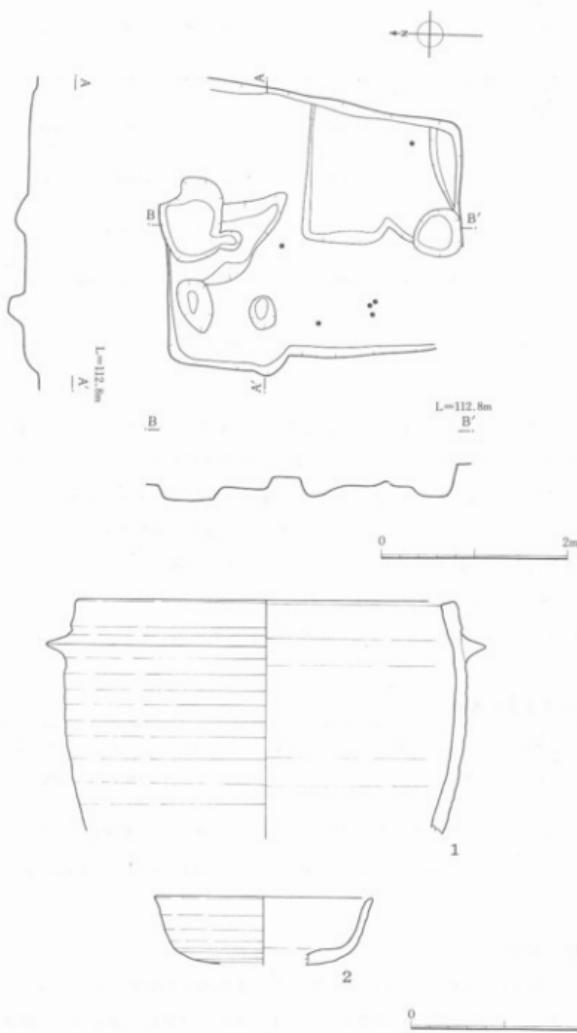
10号住居址（第16図）

本住居址は調査区北西部D-9区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土で、覆土も同質の土層より構成されているため、壁面等の硬度の若干差により調査を実施した。本址は南部および北部に第7号と第17号住居址が重複しているが、その新旧関係は不明である。平面形は南部が第7号住居址と重複しているために不明であるが、東西軸長2.75mの台形状を呈している。床面は全体的に軟弱であるが、ほぼ平坦と言える。柱穴および周溝は検出されていない。また、北西部の覆土中より砂質凝灰岩が出土している。

カマドは東壁南寄りに位置する。壁をV字形平面に掘り込み構築されており、また袖部より砂質凝灰岩を用いていることから天井等は同切石より構架されていたと考えられる。また、覆土中の砂質凝灰岩は本カマドに使用されていた可能性も推定される。燃焼部は平坦で、中央部に到着した环による支脚が認められる。煙道部は細長く、かなりゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。また、煙道部の壁上部は厚さ1cm程で焼土化しており、対照的に下部は焼土化が認められない。



第16図 10号住居址・出土遺物



第17図 11号住居址・出土遺物

表12 11号住居址出土遺物

番号	器種	器高～口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師壺	3.3 12.0	口縁部から内面全面にヨコナデ。体部外間に同心円状にケズリ。	砂礫多	酸化	にぶい赤褐色	カマド
2	土師壺	3.6 15.2 10.0	口縁部ヨコナデ。内面にはヨコナデ後、放射状の施文を施す。体部外間に横位のケズリ。底部にケズリ。	砂礫多	酸化	明赤褐色	カマド
3	环	3.5 11.2 5.0	右ヨクロ整形。回転糸切り無調整。	礫若干	酸化	黄褐色	カマド
4	环	2.8 10.0 6.2	右ヨクロ整形。回転糸切り無調整。	礫多	酸化	明赤褐色	床
5	須恵环	— —	右ヨクロ整形。回転糸切り。	礫若干	還元軟質	灰白色	カマド
6	須恵高台环	7.1 13.2 9.1	右ヨクロ整形。回転糸切り無調整。	礫やや多	還元やや軟質	明灰色	覆土
7	鉄製釘	—	—	—	—	—	—

11号住居址（第17図）

本住居址は調査区中央北部のC-8区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土の単層である。平面形は北東隅と南西隅が消失しているが長方形を呈す。規模は長軸長3.25m、短軸長2.8mである。床面は極めて軟弱で、部分的に検出できず、最終的には凹凸の激しい状態になってしまった。柱穴および周溝等は検出されていない。

カマドは東壁北部に（東西のエレベーションライン上）設置されていたらしいが、若干の焼土と壁への浅い掘り込みが確認されたにすぎない。

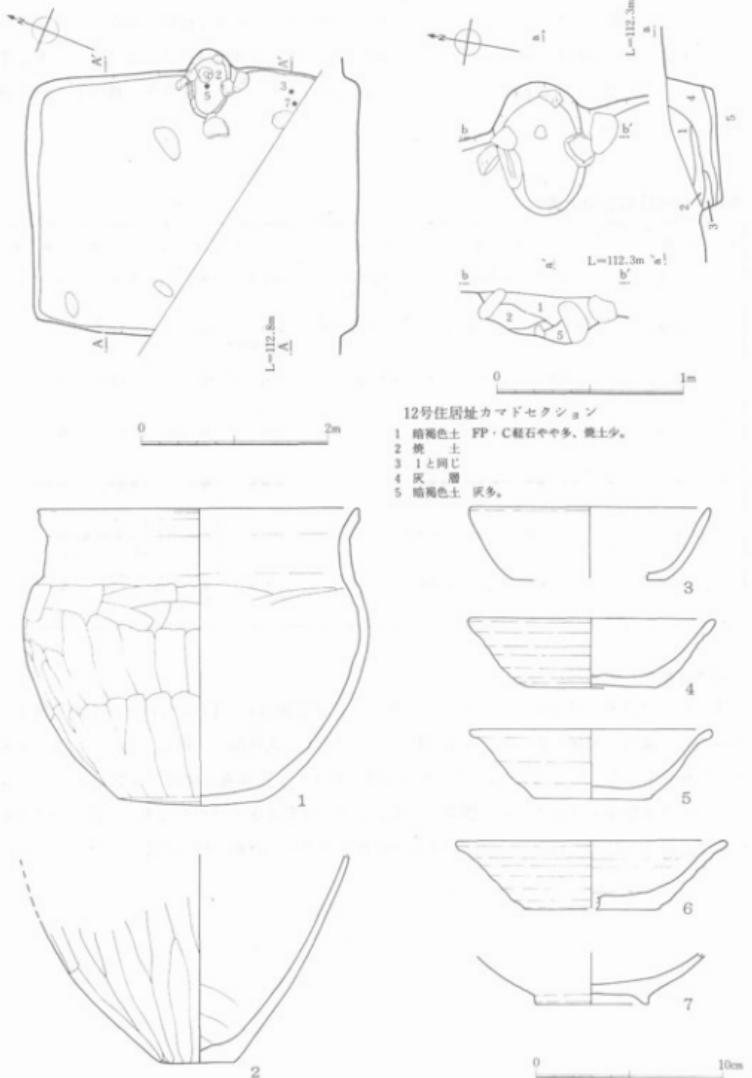
本址は住居址としての可能性を示すものの積極的に判断することができない。

表13 11号住居址出土遺物

番号	器種	器高～口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	羽釜	— 20.4	ヨクロ整形。	礫少	酸化	棕褐色	覆土
2	須恵环	3.7 11.6 —	右ヨクロ整形。体部下端から底部にかけて回転ヘラヶズリ。	礫少	還元硬質	灰色	床

12号住居址（第18図）

本址住居址は調査区南西部J-8区に位置する。確認面は茶褐色土層で、覆土はC・FPを含む黒色土である。本址は南部が未調査に延び、また東部では第14号溝を切って構築している。平面形は長方形を呈すと思われ、東西軸長2.85m、南北軸長が3m以上の規模をもつ。床面は軟弱であるが、ほぼ平坦で、茶褐色土層により構成されている。壁はほぼ直立して立ち上がる。柱穴および周溝は検出されていない。



第18図 12号住居址・出土遺物

カマドは東壁のほぼ中央部に位置すると想定される。煙道部は壁をU字形平面に掘り込み構築されており、先端で直立するように立ち上がる。燃焼部は住居址空間内に存在し、河原石を用いた支脚が認められる。袖は河原石により構成され、壁の前面に伸びている。また、本址覆土や床面上に大型の石材が検出されており、これら石材は本カマドの天井等を構成していた可能性が想定される。

表14 12号住居址出土遺物

番号	器種	器高 口径 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師壺	16.0 17.2 7.1	口縁ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。胴部外面上部を右から左へのケズリ抜。中位以下を上から下へのケズリを施す。底部は不定方向のケズリ。	砂礫多	酸化	暗赤褐色	床
2	土師壺	— — 3.9	胴部内面ヘラナデ。胴部位のケズリ。底部ケズリ。	砂礫少 赤色酸化物少	酸化	暗赤褐色	カマド
3	土師壺	3.9 12.8 8.4	口縁部から内面全面にヨコナデ。体部に横位のケズリ。	砂粒多	酸化	明赤褐色	床
4	須恵壺	3.7 13.0 7.0	ロクロ整形。回転糸切り無調整。	織多	還元軟質	灰色	覆土
5	壺	3.8 12.8 6.1	ロクロ整形。回転糸切り無調整。	砂礫多	酸化	黄褐色	カマド
6	須恵壺	3.7 14.4 7.0	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	砂粒多	半還元軟質	灰色～灰褐色	覆土
7	須恵壺	— — 6.0	ロクロ整形。回転糸切り無調整。	砂粒多	還元やや軟質	明灰色	覆土

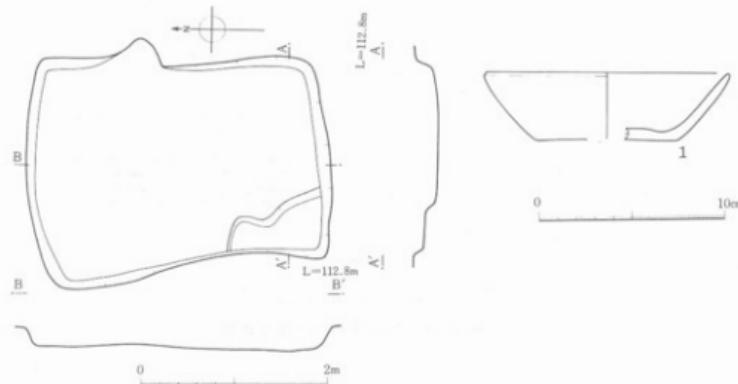
13号住居址（第19図）

本住居址は調査区北部中央C-8区に位置する。確認面はC・FPを含む黒色土で、覆土と同質のため調査が困難であった。床面は軟弱で平坦だが、南北隅が一段高くなっている。平面形は長軸長3.25m、短軸長2.5mの長方形を呈す。柱穴および周溝は検出されていない。

カマドは東壁中央部北寄りに位置する。壁をU字平面形に掘り込んだと考えられ、その部分に若干の焼土が認められたにすぎず、大部分は削平を受けて詳細不明である。

表15 13号住居址出土遺物

番号	器種	器高(口径) cm 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵環	3.7 13.0 7.6	ロクロ整形。回転ヘラ切り。	黒色鉱物粒 含む。	還元硬質	灰色	覆土



第19図 13号住居址・出土遺物

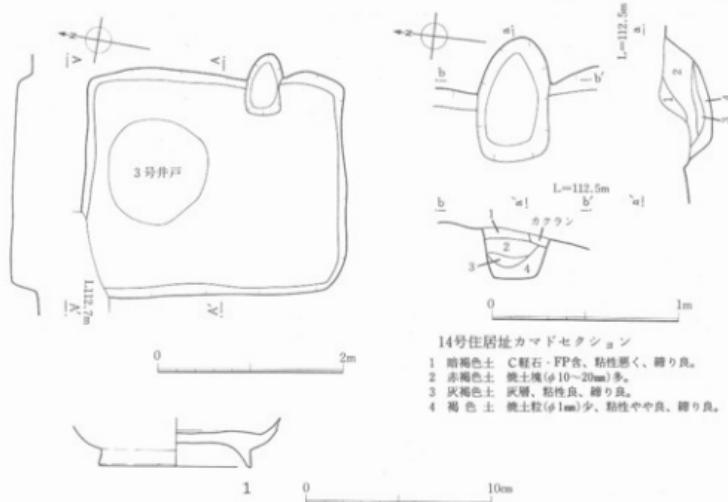
14号住居址（第20図）

本住居址は調査区西部中央に位置する。確認面は黒色粘質土から茶褐色土で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土の単層である。本址は3号井戸に切られており、15号土塙とも重複するが新旧関係は不明である。平面形は長軸長2.85m、短軸長2.25mの長方形を呈す。床面は軟弱であるが平坦である。柱穴および周溝は検出されていない。

カマドは東壁南部に位置する。煙道部は壁をU字形平面に掘り込み、やや急角度な立ち上がりである。燃焼部は住居址内にあり、土塙状を呈す。

表16 14号住居址出土遺物

番号	器種	器高(口径) cm 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵高台 环	— 4.2	ロクロ整形。回転ヘラ切り無調整。	黒色鉱物	還元硬質	灰褐色	覆土



第20図 14号住居址・出土遺物

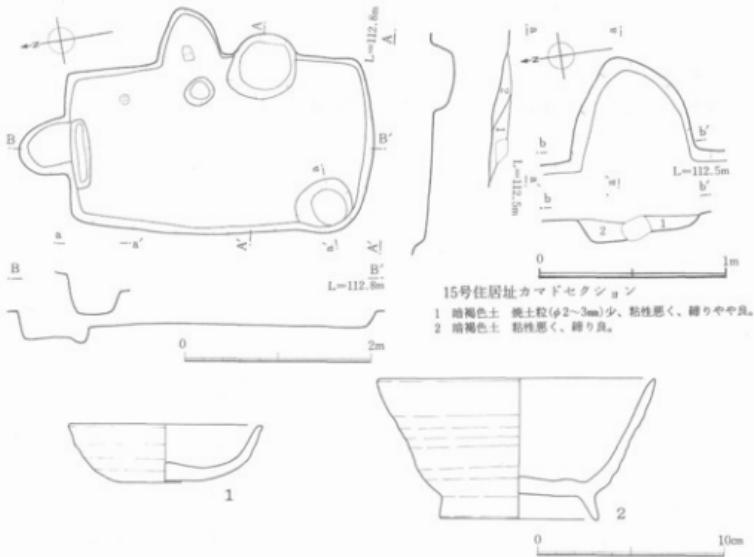
15号住居址（第21図）

本住居址は調査区中央部G-8区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は長軸3.25m、短軸長1.9mの長方形である。本址内には小規模な土塁が重複しており、これら土塁と本址との関係は不明である。柱穴および周溝は検出されていない。床面は黒色粘質土により構成され、ほぼ平坦である。

カマドは東壁中央北寄りに位置する。煙道部は壁をU字形平面に掘り込み構築されており、立ち上がりはゆるやかである。カマド内には崩壊した砂質凝灰岩が検出されていることから天井部等はこれらの石材により構架されていたと考えられる。燃焼部は平坦で、焼土化していない。

表17 15号住居址出土遺物

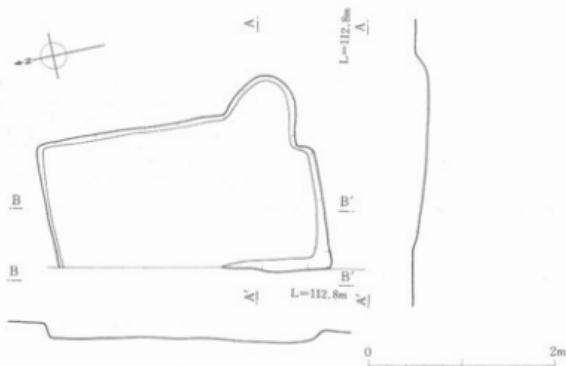
番号	器種	器高 口徑 底径 cm	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	环	3.1 10.4 4.5	ロクロ整形。回転系切り無調整	黒色粘土粒 と砂粒含む。	酸化	黄褐色	覆土
2	須恵环	7.7 14.7 4.4	右ロクロ整形。切り離し不明。	織	還元状質	灰白色	覆土



第21図 15号住居址・出土遺物

16号住居址（第22図）

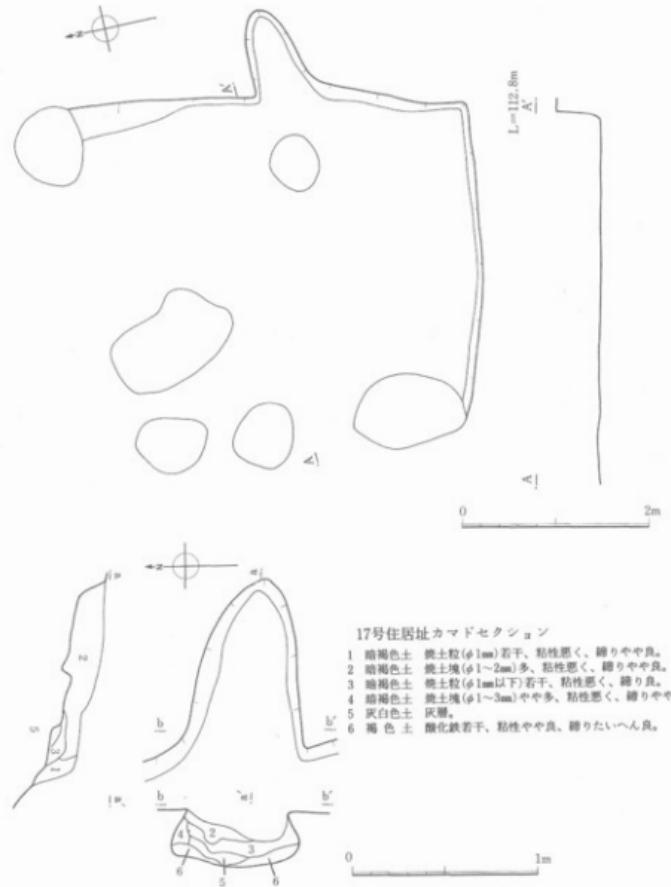
本住居址は中央部G-7区に位置する。確認面は黒色粘質土から茶褐色土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。住居址西部は試掘トレンチにより削平されている。平面形は長軸2.85m、短軸1.9mの長方形を呈す。柱穴および周溝は検出されない。床面は黒色粘質土により構成される。



第22図 16号住居址

カマドは東壁南部に位置する。煙道部はU字形平面に掘り込み、立ち上がりはゆるやかである。燃焼部は平坦で、若干の焼土が認められる。

遺物はその出土量が極めて少なく、さらに全てが細片である。



第23図 17号住居址

17号住居址（第23図）

本住居址は調査区北西部C-9区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土で、覆土は確認と同質の土層の単純層である。本址は7号住居址と重複関係あるが、その新旧関係は不明である。また、本址の調査には困難を極め、確実に本遺構と言えるのは東壁とカマドに限定された。南壁はやや不安をもち、北壁および西壁は検出することができなかつた。現状のところ方形プランを想定でき、柱穴および周溝等は検出できなかつた。

カマドは壁を掘り込み構築されている。煙道部は細長いV字形を呈し、水平に伸びて先端において急角度で立ち上がる。また、煙道部壁面上位には厚さ1cm程度で焼土化しているが、中位以下には認められない。燃焼部は焼土化が一部に認められる。

遺物は細片で、少量の検出にとどまつた。

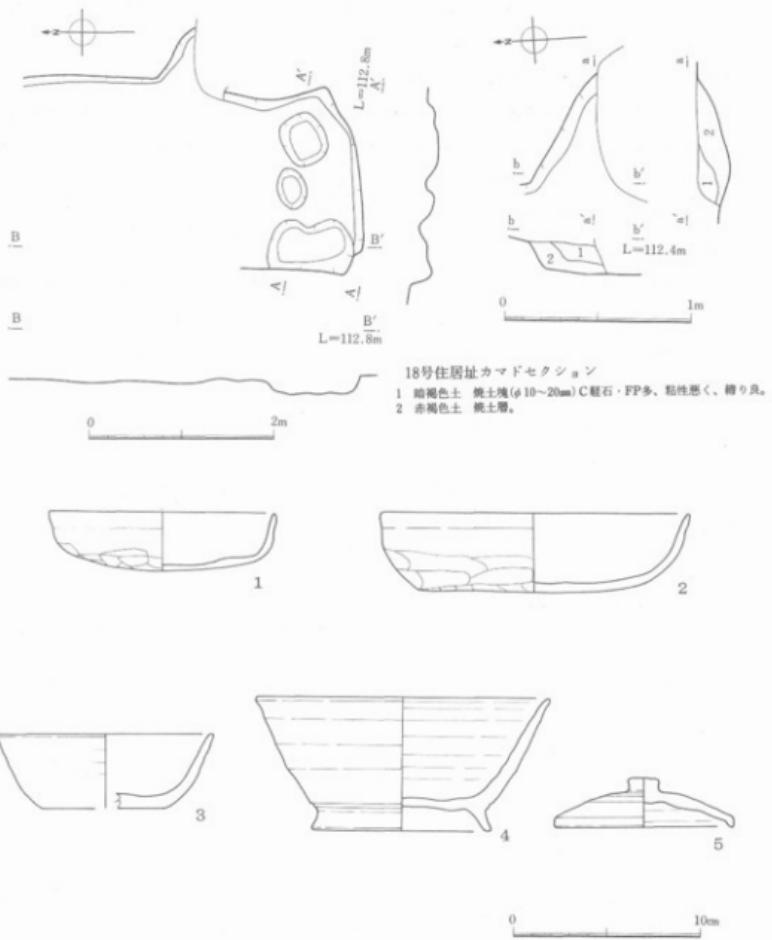
18号住居址（第24図）

本住居址は調査区北西部に位置する。確認面はC・FPを含む黒色土で、覆土は同質の黒色土である。そのため、調査は困難を極めた。本址はカマド部分が39b土塙により削平を受けている。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は北部および西部がすでに消失していたため詳細不明だが、短軸長2.85m、長軸長3.6m以上の方形を成すと考えられる。床面は黒色粘質土により構成され、凹凸が激しい。柱穴および周溝は検出されていない。住居址南部の土塙は本址に伴うものか不明である。

カマドは東壁中央やや南寄りに構築されており、南部半を39b土塙により削平されている。煙道は壁をV字形平面に掘り込み構築され、立ち上がりはゆるやかな傾斜をもつ。

表18 18号住居址出土遺物

番号	器種	器高 口径 底径 直徑	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師環	3.2 12.2 —	口縁部から内面全面にココナデ。底部内面にケズリを施す。	砂礫多	酸化	にぶい赤褐色	覆土
2	土師環	4.2 16.5 —	口縁部から内面全面にココナデ。底部外側にケズリを施す。	砂礫多	酸化	明赤褐色	覆土
3	須恵環	4.0 11.6 6.8 —	口クロ整形。回転角切り無調整。	砂粒	還元軟質	灰色	覆土
4	須恵高台 环	7.2 15.8 9.6 —	右口クロ整形。体部下端にケズリ。底部切り離し後、回転ヘラケズリ。	黑色粘物質	還元硬質	灰色	覆土
5	須恵蓋	2.7 9.9 —	口クロ整形。天井1/2回転ヘラケズリ。	礫多	還元や硬質	灰白色	覆土



第24図 18号居住址・出土遺物

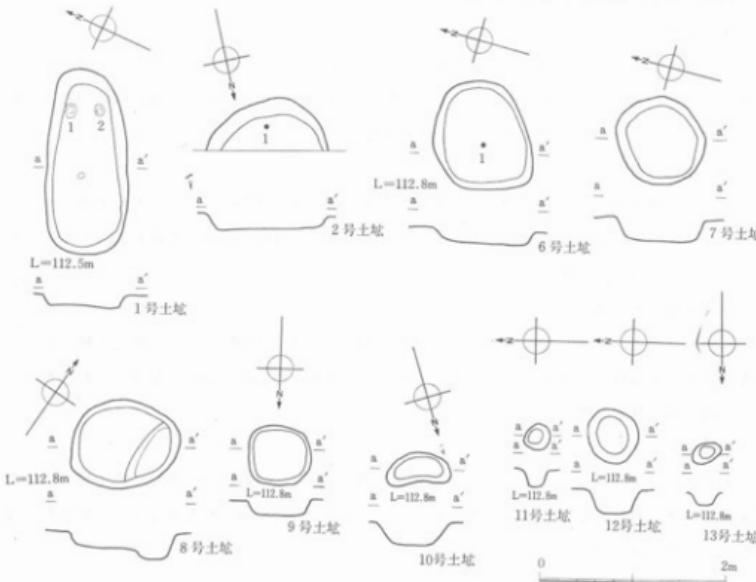
土 塚

1号土塚（第25図）

本土塚は調査区北西部A-2区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む褐色土の単層である。平面形は長軸長200cm×短軸長90cmの橢円形を呈している。断面形は深さ14cmの鍋底状を呈している。壁はほぼ直立して立ち上がる。底面はほぼ平坦と言え、黒色粘質土により構成される。また、本土塚南部と中央部に底面より遺物が出土している。南部では壺が2点、中央部では性格不明の石製品が1点それぞれ出土している。

2号土塚（第25図）

本土塚は調査区北西部A-2区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む褐色土の単層である。本土塚北部は未調査区に延びており、詳細は不明である。現状では径1.22mの半円形を呈している。断面形は深さ20cmの鍋底状を呈する。底面は東に向ってやや傾斜するが、平坦である。



第25図 土 塚(1)

3・4・5号土塙 欠番

6号土塙（第25図）

本土塙は調査区北東部E-10区に位置する。確認面はC・FPを含む黒色土層である。覆土は浅間山B軽石を多量に含む黒色土である。平面形は長軸長124cm×短軸長102cmの椭円形を呈している。断面形は深さ16cmの鍋底状呈し、底面はほぼ平坦である。また、底面に接して土師器杯が出土している。

7号土塙（第25図）

本土塙は調査区北東部E-10区に位置する。確認面はC・FPを含む黒色土層である。覆土は浅間山B軽石を多量に含む黒色土である。平面形は径95cmの不整円形を呈している。断面形は深さ24cmの鍋底状を呈し、底面は平坦である。

8号土塙（第25図）

本土塙は調査区北東部G-11区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土層である。覆土は浅間山B軽石を多量に含む黒色土である。平面形は長軸長120cm×短軸長98cmの椭円形である。断面形は深さ18cmの鍋底状を呈すが、土塙東部でさらに10cm程度低くなっている。この部分もまた鍋底状を呈している。

9号土塙（第25図）

本土塙は調査区北東部D-11区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土層である。覆土は浅間山B軽石を多量に含む黒色土である。平面形は長軸長68cm×短軸長64cmの隅丸方形を呈している。断面形は深さ16cmで、鍋底状を呈し、底面はほぼ平坦である。

10号土塙（第25図）

本土塙は調査区北東部D-11区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土層である。覆土は浅間山B軽石を多量に含む黒色土である。平面形は長軸長68cm×短軸長30cmの半月状を呈している。断面形は深さ14cmの鍋底状を呈す。

11号土塙（第25図）

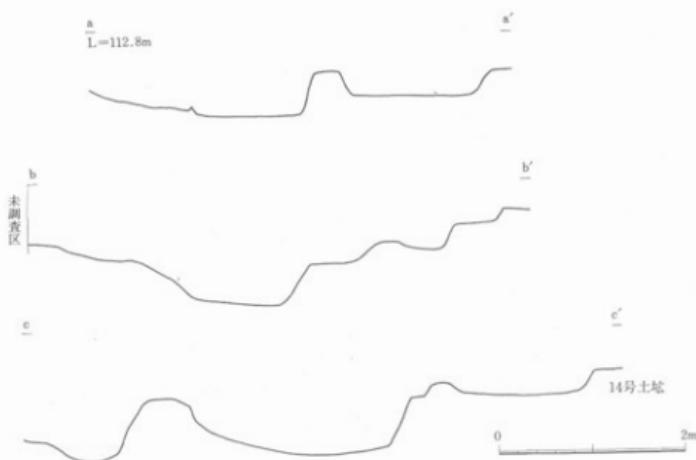
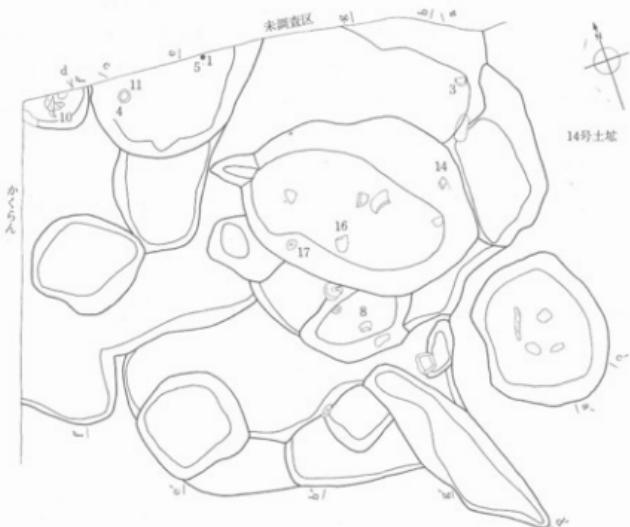
本土塙は調査区北東部D-11区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土層である。覆土は浅間山B軽石を多量に含む黒色土である。平面形は径30cmの卵形を呈する。断面形は深さ13cmの鍋底状を呈す。

12号土塙（第25図）

本土塙は調査区北東部D-11区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土層である。覆土は浅間山B軽石を多量に含む黒色土である。平面形は径54cmの円形を呈する。断面形は深さ26cmの鍋底状を呈する。

13号土塙（第25図）

本土塙は調査区北東部D-11区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土層である。覆土は浅間山B軽石を多量に含む黒色土である。平面形は長軸長35cm×短軸長25cmの卵形を呈する。断面形は深さ14cmの鍋底状を呈す。



第26図 土 坡 (2)

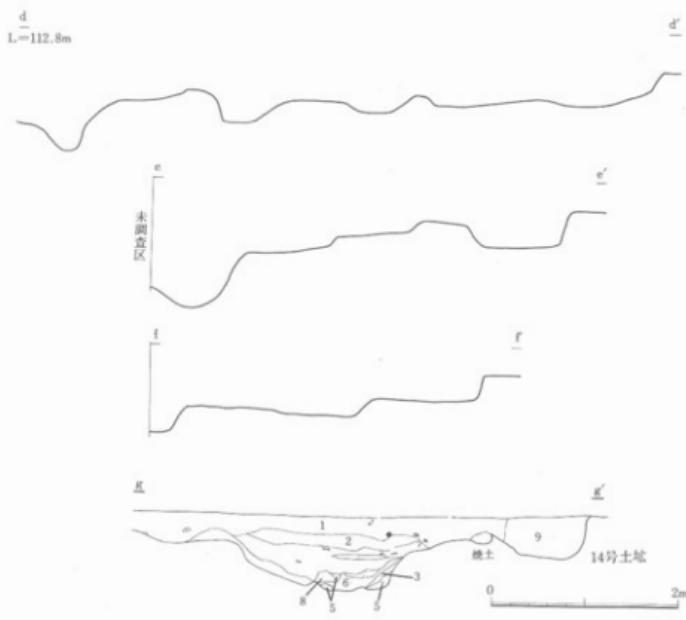
14号土塙（第26図）

本土塙は調査区東端中央のG-11区に位置する。本土塙は多數の土塙が重複し合う集合体を成しており、各々の土塙を明確に区分することができないため、まとめて取り扱うこととした。この土塙群は南北約6m×東西6mの範囲に15基以上の土塙が集中する。また、東部は未調査区に延び、北部は攪乱により削平されている。確認面は黒色粘質土および茶褐色土である。各土塙の形状は多種多様で、円形、橢円形、隅丸方形、溝状と一定していない。断面形は鍋底状、皿状とやはり多様で、深さもまた浅い例から深い例までと一定していない。これの土塙はセクションより新旧関係が認められる例もあるが、多くはその関係は不明である。

遺物は多数出土しており、いずれも覆土中より出土している。これらの遺物は全て廃棄されたものと考えられ、土塙に伴う例は皆無である。

15号土塙（第28図）

本土塙は調査区東部中央のG-9区に位置する。確認面は黒色粘質土および茶褐色土である。



第27図 土 塙 (3)

平面形は長軸長3.25m×短軸長1.7mの椭円形を呈す。底面は東半部が深くなり、西半部が浅くなっている。東半部は2つの円形の土塙が重複する形状を成しており、ひとつが径125cm、深さ58cm、他が径95cm、深さ56cmである。これらの底面形状等より3つの土塙の重複が想定できるが、その新旧関係は不明である。

16号土塙（第28図）

本土塙は調査区東部中央のF-9区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は長軸長172cm×短軸長130cmの隅丸の長方形を呈す。断面形は深さ20cmの鍋底状を呈す。

17・19・20・21・22号土塙 欠番

18号土塙（第28図）

本土塙は調査区北部中央のD-7区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土は粘性良好な暗褐色土で、この覆土にはC・FP軽石が皆無であることより古墳時代以前を想定できる。平面形は東半部を試掘トレチにより削平され不明であるが、残存部は径90cmの半円形を呈す。深さは38cmである。

23号土塙（第28図）

本土塙は調査区北端のB-6区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は長軸長112cm×短軸長82cmの不整方形を呈す。底面は南東方向に傾斜しており、2ヶ所にピットが認められる。

24号土塙（第28図）

本土塙は調査区北端のB-6区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は長軸長240cm×短軸長105cmの長椭円形である。底面は南部に向って傾斜しており、北部に浅いピットを伴う。壁は東が直立気味に立ち上がり、西が傾斜して立ち上がる。

25号土塙（第28図）

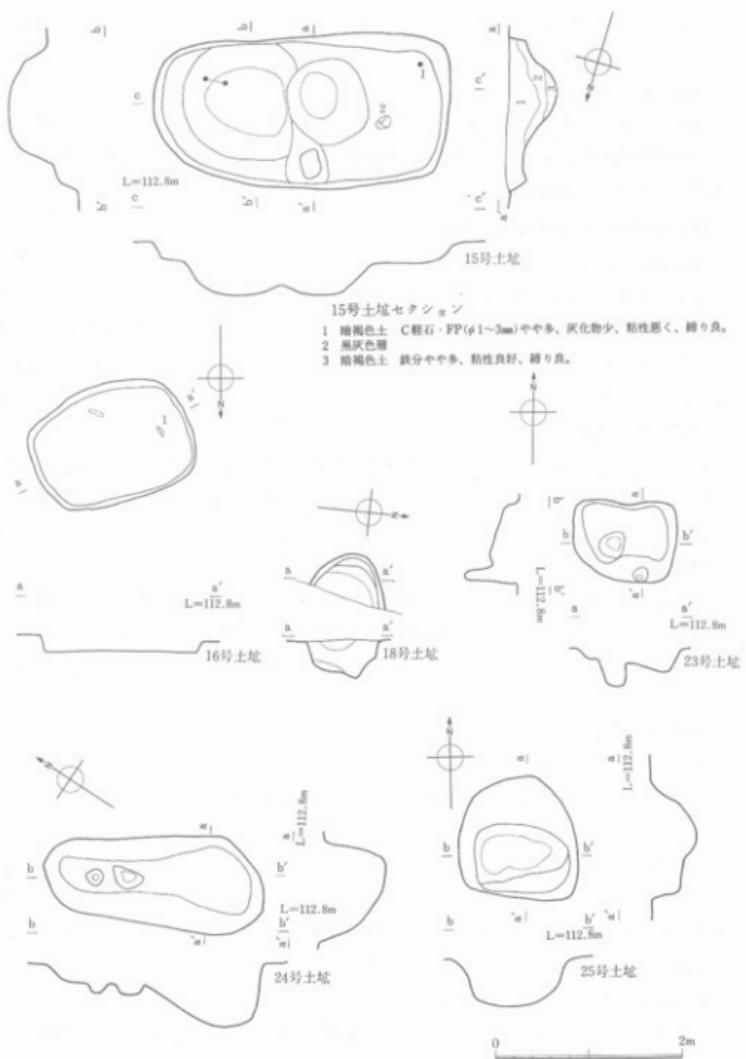
本土塙は調査区北端のC-5区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は長軸長154cm×短軸長130cmの不整円形を呈する。深さ53cmで、底面は皿状を呈す。壁は南壁が直立気味で、他が傾斜をもって立ち上がる。

26号土塙（第29図）

本土塙は調査区北端のC-5区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は長軸長140cm×短軸長95cmの瓢形を呈す。断面形は深さ20cmの鍋底状を呈す。

27号土塙（第29図）

本土塙は調査区北端B-5区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は長軸長80cm×短軸長39cmの長椭円形を呈す。断面形は深さ28cmの鍋底状を呈す。



第28図 土 塙 (4)

28号土塙（第29図）

本調査区北端のB-5区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は北部が未調査区に延びており不明だが、残存部より長軸長112cm以上×短軸長85cmの不整方形が推定される。断面形は深さ7cmの皿状を呈す。

29号土塙（第29図）

本調査区北端のB-5区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は長軸長56cm×短軸50cmの不整円形を呈す。断面形は深さ16cmの鍋底状を呈す。

30号土塙（第29図）

本土塙は調査区北端のB-5区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は長軸長45cm×短軸長48cmの不整円形である。断面形は深さ18cmの鍋底状を呈す。

31号土塙（第29図）

本土塙は調査区北端のB-5区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は径28cmの円形を呈す。断面形は深さ24cmの鍋底状を呈す。

32号土塙（第29図）

本土塙は調査区北端のB-4区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は径26cmの円形を呈す。断面形は深さ26cmの鍋底状を呈す。

33号土塙（第29図）

本土塙は調査区北端のB-4区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は径20cmの円形を呈す。断面形は深さ20cmの鍋底状を呈す。

34号土塙（第29図）

本土塙は調査区北端B-5区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は径22cmの円形を呈す。断面形は深さ14cmの鍋底状を呈す。

35号土塙（第29図）

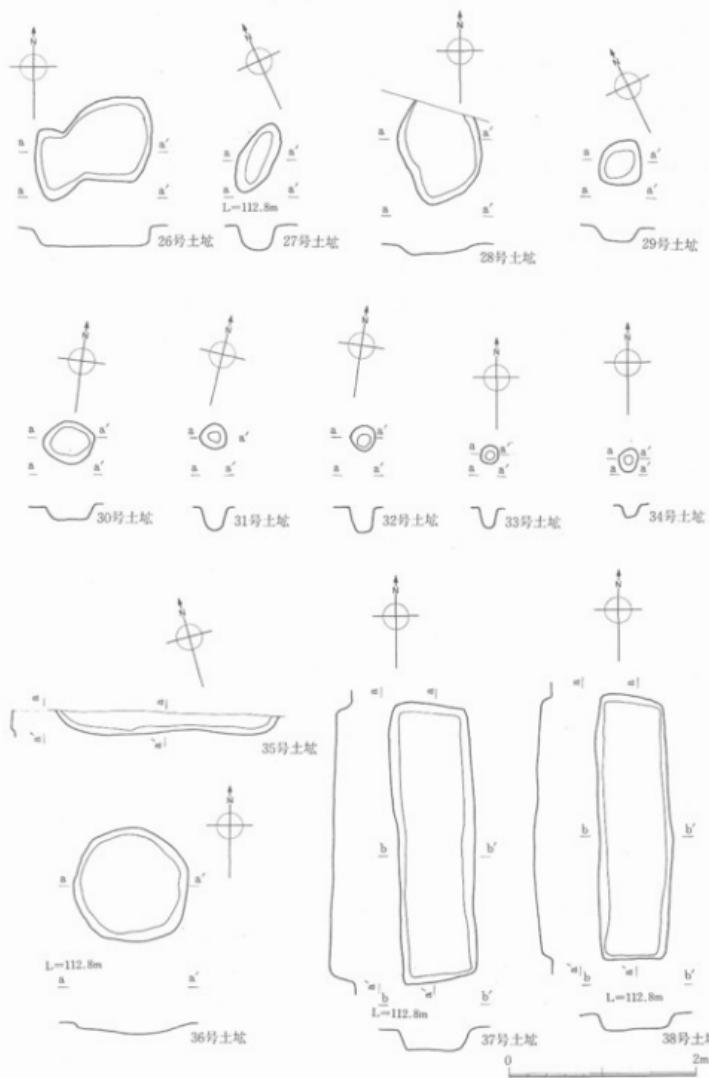
本土塙は調査区北端のB-4区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は本土塙の大部分が未調査区に延びるため不明である。断面形は深さ4cmの皿状を呈す。

36号土塙（第29図）

本土塙は調査区中央部のD-6区に位置する。確認面は黒色粘質土層である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。平面形は径12.0cmの円形を呈す。断面形は深さ10cmの皿状を呈している。また、底面には全面に炭層が認められ、この炭層は厚さ数mm程度である。この炭層下は焼土が存在しない。

37号土塙（第29図）

本土塙は調査区北西部D-3区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土は浅間山B軽



第29図 土 塙 (5)

石を多く含む褐色土である。平面形は長軸長300cm×短軸長88cmの長方形を呈す。壁はやや傾斜をもち、底面は平坦である。

38号土塙（第29図）

本土塙は調査区北西部C-2区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土は浅間山B軽石を多く含む褐色土である。平面形は長軸長285cm×短軸長80cmの長方形を呈す。底面はやや平坦で、壁は直立する。

39号A土塙（第30図）

本土塙は調査区北東部D-11区に位置する。確認面は黒色粘質土である。平面形は長軸長245cm、短軸長165cmの楕円形を呈す。底面は皿状を呈しており、中央部に径20cm、深さ15cm程度の小ビットが存在する。

39号B土塙（第30図）

本土塙は調査区北東部D-11区に位置する。確認面は黒色粘質土である。本土塙西部で第39号a土塙と重複するが、その新旧関係は不明である。平面形は長軸長160cm×短軸150cmの楕円形を呈している。断面形は深さ55cmの鍋底状を呈す。

39号C土塙（第30図）

本土塙は調査区北東部C-11区に位置する。確認面は黒色粘質土である。平面形は北部が未調査区に延びるため不明だが、調査部分において径175cmの半円形を呈している。断面形は深さ50cmの擂鉢状を呈す。

39号D土塙（第30図）

本土塙は調査区北東部C-11区に位置する。確認面は黒色粘質土である。本土塙は北部が未調査区に延びる。平面形は長軸長95cm以上×短軸長92cmの卵形を呈すると想定される。断面形は深さ37cmの鍋底状を呈する。覆土中には遺物が集中していた。

39号E土塙（第30図）

本土塙は調査区北東部D-11区に位置する。確認面は黒色粘質土である。平面形は径100cmの円形を呈する。断面形は深さ60cmの鍋底状を呈する。

39号F土塙（第30図）

本土塙は調査区北東部D-11区に位置する。確認面は黒色粘質土である。平面形は径58cmの円形である。断面形は深さ50cmの鍋底状を呈す。

39号G土塙（第30図）

本土塙は調査区北東部D-12区に位置する。確認面は黒色粘質土である。平面形は径55cmの不整円形を呈す。断面形は深さ24cmの鍋底状を呈す。

39号H土塙（第31図）

本土塙は調査区北東部のE-10区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黑色土である。平面形は東壁がすでに消失しているが、径205cmの円形を呈す。断面形は深さ5cm程度の皿状を呈す。

39号 I 土塙（第31図）

本土塙は調査区北東部F-12区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。第39号N土塙と重複するが、その新旧関係は不明である。全体の形状は東部が未調査区に延びるため不明である。断面形は深さ30cmの鍋底状を呈す。

39号 J 土塙（第31図）

本土塙は調査区北東部E-11区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は長軸長155cm×短軸長93cmの不整形を呈す。断面形は深さ14cmの皿状を呈す。

39号 K 土塙（第31図）

本土塙は調査区北東部E-12区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は東部が未調査区に延びているため不明である。断面形は深さ20cmの皿状を呈する。

39号 L 土塙（第31図）

本土塙は調査区北東部のE-12区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。本土塙は第39号J・M土塙と重複するが、ともに新旧関係は不明である。平面形は径80cmの円形を呈する。断面形は深さ15cmの皿状を呈す。

39号 M 土塙（第31図）

本土塙は調査区北東部E-12区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。本土塙は第39号L・N両土塙に重複するが、新旧関係は不明である。平面形は梢円形であったと想定される。断面形は深さ7cmの皿状を呈す。

39号 N 土塙（第31図）

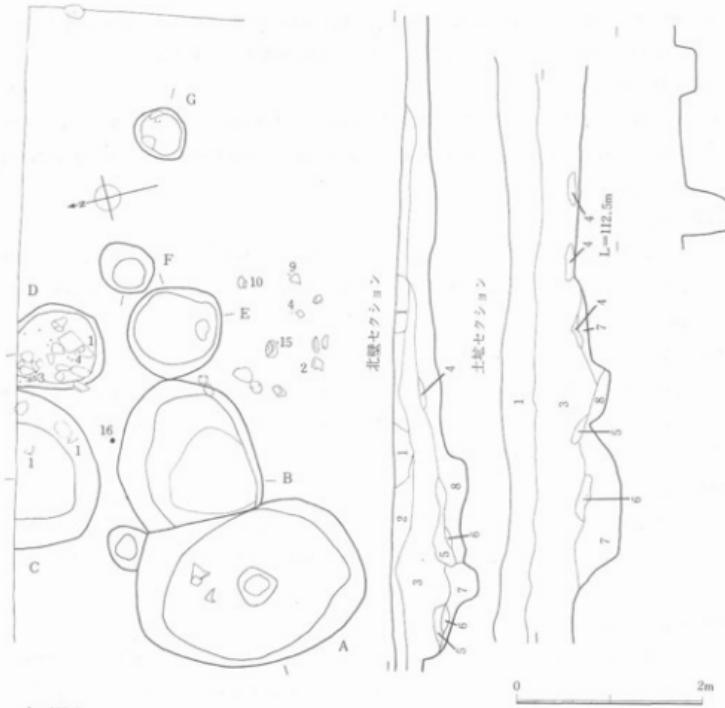
本土塙は調査区北東部F-12区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。本土塙は第39号M・I両土塙と重複するが、ともに新旧関係は不明である。平面形は径110cmの不整円形を呈し、断面形は深さ30cmの鍋底状を呈す。

40号 土塙（第32図）

本土塙は調査区北端のD-9区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。本土塙は第17号住居址と重複するが、その新旧関係は不明である。平面形は長軸長64cm×短軸長54cmの卵形を呈す。断面形は深さ100cm程度の柱穴状を呈す。

41号 土塙（第32図）

本土塙は調査区北部のC-9区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土層である。本土塙は第17号住居址と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は長軸長85cm×短軸長78cmの不整円形である。断面形は深さ129cmと極めて深く、柱穴状を呈している。



$L=112.5m$

$L=112.5m$

39号土壤セクション

- 1 B鉱石層。
- 2 細褐色土。C軽石・FP($\phi 2\sim3mm$)多、粘性悪く、縛り良。
- 3 黒灰色土。灰層。
- 4 細褐色土。礁土塊($\phi 10\sim100mm$)多、粘性やや良、縛り良。
- 5 硫土ブロック層。
- 6 黒褐色土。炭化物($\phi 2\sim3mm$)や多、粘性、縛りとも良。
- 7 黒褐色土。炭化物($\phi 1\sim3mm$)少、粘性、縛りとも良。
- 8 細褐色土。炭土粒($\phi 1\sim3mm$)少、粘性、縛りとも良。

39号土壤北壁セクション

- 1 表土。
- 2 B鉱石多量に含む黒色土。一部に灰。
- 3 細褐色土。C軽石・FP($\phi 1\sim3mm$)、炭化物($\phi 1\sim5mm$)少、粘性悪く縛り良。
- 4 細褐色土。C軽石($\phi 1\sim3mm$)、鉱石の集中。
- 5 黑灰色炭化物層。
- 6 細黃褐色土。C軽石・FP($\phi 1\sim3mm$)多、粘性悪く、縛り良。
- 7 黄褐色土。C軽石・FP($\phi 1\sim3mm$)少、粘性やや良、縛り良。
- 8 細褐色土。炭化物多、粘性良、縛り悪。

第30図 土 壤 (6)

42号土塙（第32図）

本土塙は調査区北部C-9区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は長軸長134cm×短軸長90cmの不整形を呈す。底面は確認面より深さ20cm程度で二段となっており、底面よりさらに40cm程度下がり最下面となる。

43号土塙（第32図）

本土塙は調査区北部のC-8区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色である。平面形は長軸長76cm×短軸長56cmの不整橢円形を呈す。断面形は深さ18cmの皿状を成す。

44号土塙（第32図）

本土塙は調査区北部のC-8区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は長軸長78cm×短軸長63cmの不整円形を呈する。断面形は深さ54cmの鍋底状を呈す。

45号土塙（第32図）

本土塙は調査区北部のC-8区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は径70cmの不整円形を呈す。断面形は深さ28cm程度で1度段を形成し、さらにそこから33cm程度で最下面となっている。

46号土塙（第32図）

本土塙は調査区北部D-8区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は長軸長128cm×短軸長86cmの卵形を呈する。底面は北部に向って傾斜し、先端においてピット状を呈す。深さは37cmである。

47号土塙（第32図）

本土塙は調査区北部C-8区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。本土塙は北部が未調査区に延びるため平面形状は不明である。断面形は深さ18cmの鍋底状を呈す。

48号土塙（第32図）

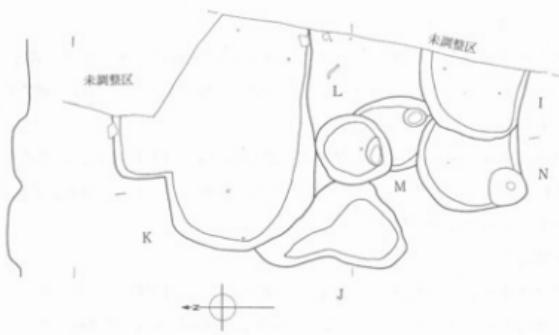
本土塙は調査区東部G-10区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は長軸長108cm×短軸長104cmの隅丸方形を呈す。断面形は深さ12cm程度の皿状を呈す。

49号土塙（第32図）

本土塙は調査区中央部F-8区に位置する。確認面は黒色粘質土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は径94cmの円形を呈す。断面形は深さ24cmの鍋底状を呈す。

50号土塙（第32図）

本土塙は北部中央のD-6区に位置する。確認面は黒色粘質土とC・FP軽石を含む黒色土に及んでいる。本塙は覆土の状況および形状等より複数の土塙の重複により現在のような形状を成したと想定される。全体の平面形は長軸長6.47m×短軸長4.65mで、南部は擾乱により破



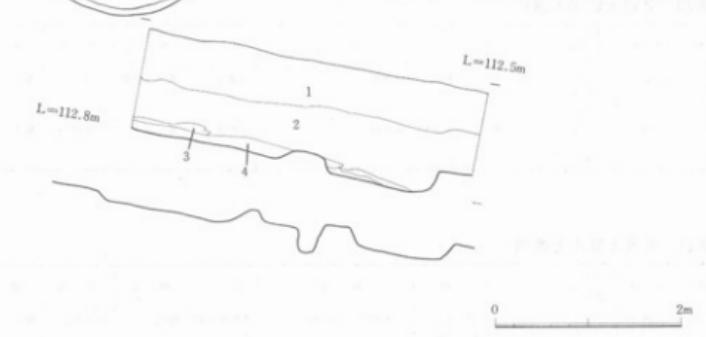
● 5

○

11
12
6
1
7

39号土塙東壁セクション

- 1 表土
- 2 暗褐色土
- 3 黒色灰層
- 4 暗褐色土 粘土粒(φ1~3mm)多、C絆石・PP少、粘性やや良、耕り良。



第31図 土塙(7)

壊されているが、不整方形を呈すると考えられる。底面は凹凸が著しく、特に西半部は円形や不整円形の土塙が集中している。他方、東半部は比較的平坦で、また東南部に焼土と立石が存在することから土塙以外に住居址も存在していた可態が認められる。

51号土塙（第32図）

本土塙は調査区南東部I-10区に位置する。確認面は茶褐色土層である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。平面形は径70cmの円形を呈す。断面形は深さ23cmの鍋底状を呈す。

52号土塙（第32図）

本土塙は調査区東南部F-11区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土である。覆土は浅間山B軽石を多く含む黒色土である。平面形は長軸長150cm×短軸長112cmの椭円形を呈す。断面形は深さ10cmの皿状を呈す。

53号土塙（第32図）

本土塙は調査区東南部F-11区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土である。覆土は浅間山B軽石を多く含む黒色土である。平面形は長軸長136cm×短軸長126cmの椭円形を呈す。断面形は深さ40cmの鍋底状を呈す。

表19 1号土塙出土遺物

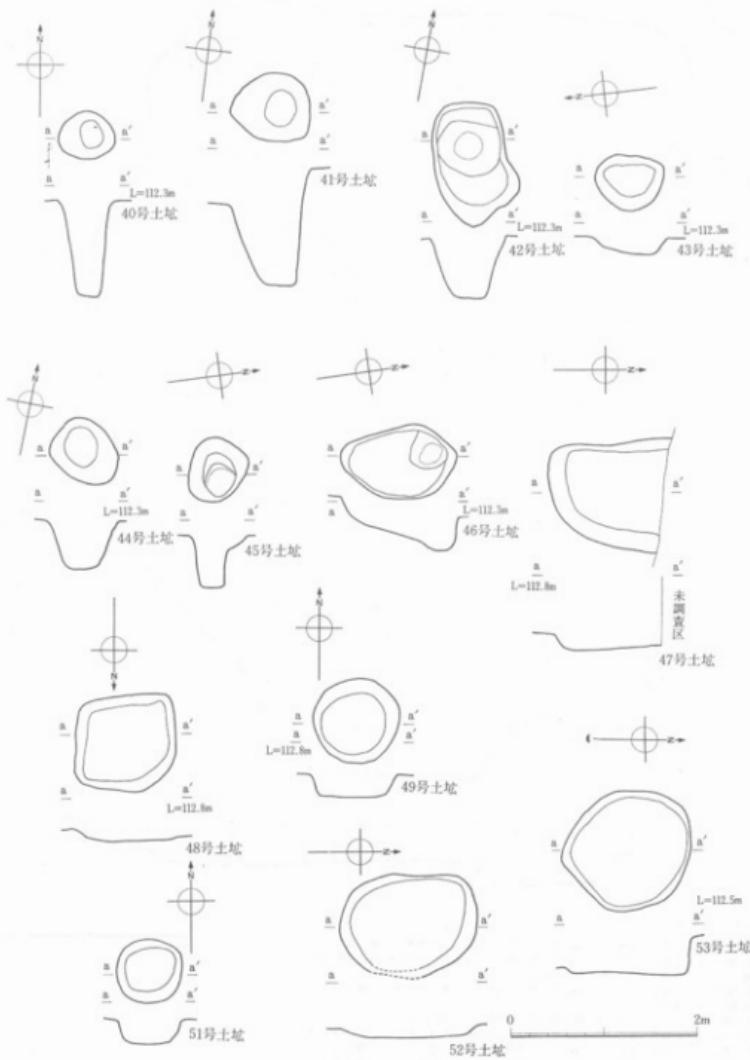
番号	器種	器高 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵高台环	8.4 16.4 10.4	右クロ彫形。底部切り離し後、回転ヘタケズリ。	硬多	還元硬質	青灰色	覆土

表20 2号土塙出土遺物

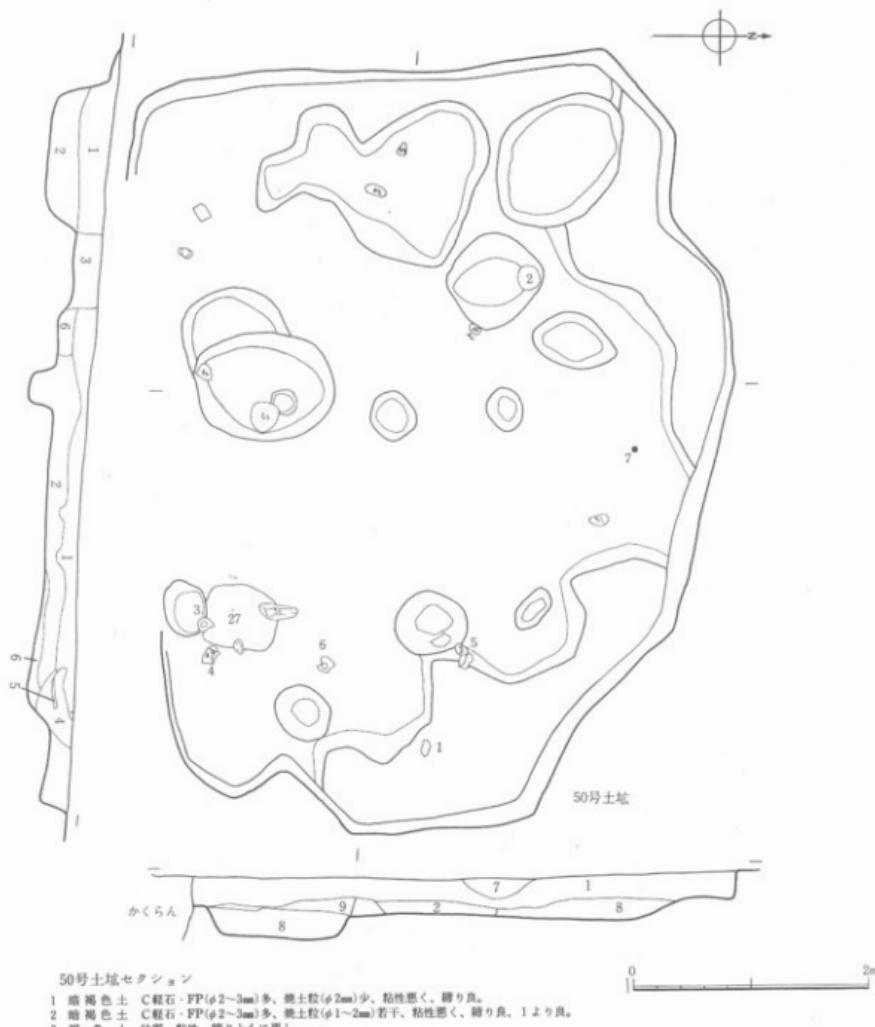
番号	器種	器高 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵环	3.8 12.6 6.2	右クロ彫形。回転糸切り無調整。	砂礫少	還元や軟質	灰白色	覆土
2	土師环	3.5 11.4 6.0	右クロ彫形。回転糸切り無調整。	砂粒多	酸化	浅黄褐色	覆土

表21 6号土塙出土遺物

番号	器種	器高 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師塙	4.4 13.9 —	口縁部から内面にヨコナデ。体部内方に定方向のケズリ後、外周を同心円状のケズリ。	赤色酸化物 多	酸化	明赤橙色	覆土



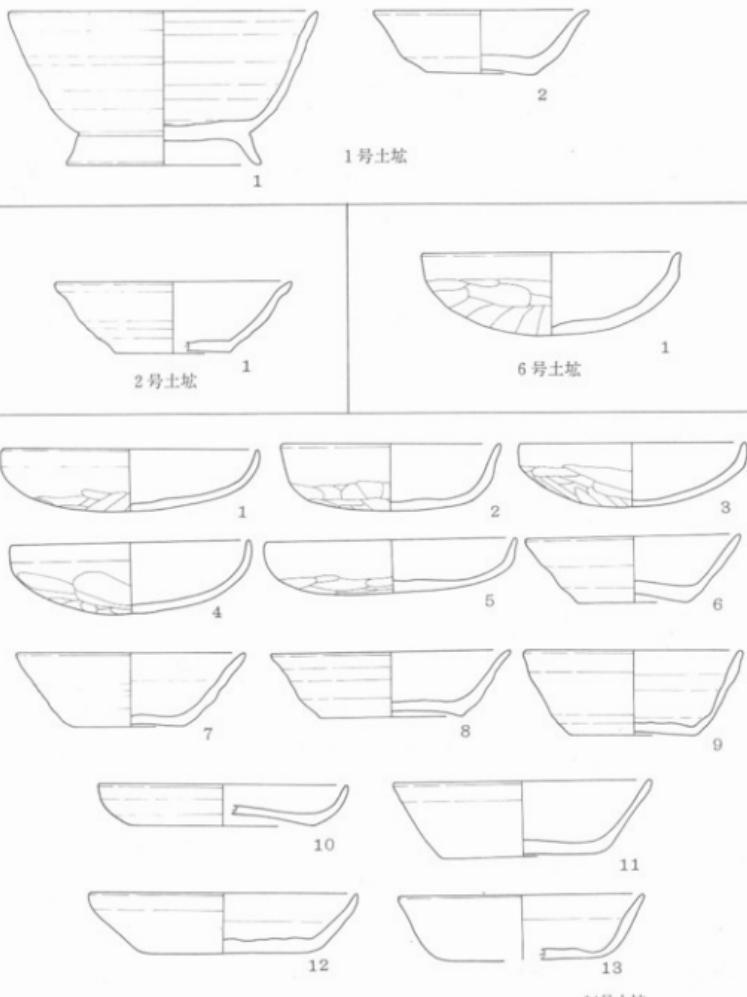
第32図 土 塚 (8)



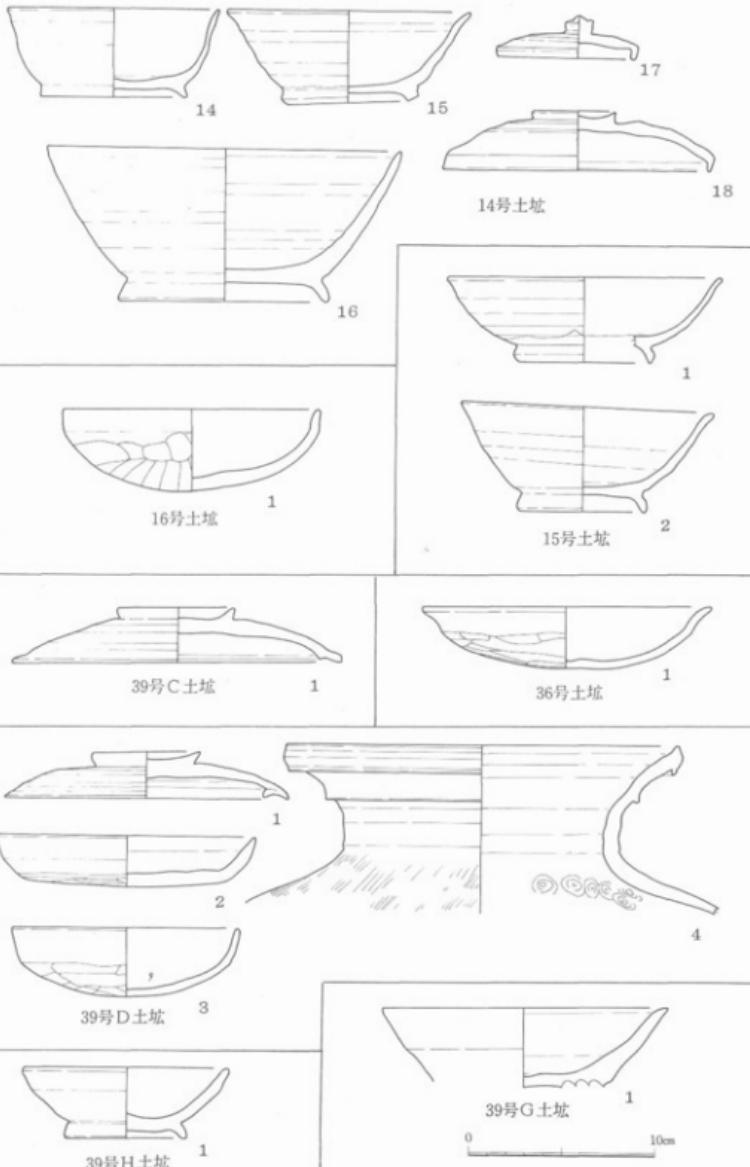
50号土壌セクション

- 1 灰褐色土 C軽石・FP(φ2~3mm)多、微土粒(φ2mm)少、粘性悪く、締り良。
- 2 灰褐色土 C軽石・FP(φ2~3mm)多、微土粒(φ1~2mm)若干、粘性悪く、締り良、1より良。
- 3 黄色土 砂質、粘性、締りともに悪 L。
- 4 灰褐色土 C軽石・FP(φ2~3mm)多、微土粒(φ1~30mm)多、粘性悪く、締り良。
- 5 灰褐色土 砂含。
- 6 灰褐色土 白色粒(φ1mm)多、離化鉄含り、粘性やや良、締り良。
- 7 灰褐色土 C軽石・FP(φ2~3mm)多、微土粒(φ2mm)やや多、粘性やや良、締り良。
- 8 灰褐色土 C軽石・FP(φ2~3mm)多、白色粒(φ1mm)少、粘性やや良、締り良。
- 9 灰褐色土 C軽石・FP(φ2~3mm)多、白色粒(φ1mm)多、粘性やや良、締り良。

第33図 土 塚 (9)



第34図 土塙出土遺物（1）



第35図 土塚出土遺物 (2)

表22 14号土塙出土遺物

番号	器種	器高 口径 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師壺	3.6 11.7 —	口縁部から内面にヨコナデ。体部から底部にケズリ。	砂礫多	酸化	にぶい赤褐色	覆土
2	土師壺	3.4 12.0 —	口縁部から内面にヨコナデ。外面体部から底部にケズリ。	砂礫多	酸化	明赤橙色	覆土
3	土師壺	3.8 11.8 —	口縁部から内面にヨコナデ。外面体部を中心から外周へ渦巻状のケズリ。	礫多	酸化	明赤橙色	覆土
4	土師壺	3.0 13.4 —	口縁部から内面にヨコナデ。外面体部に不定方向のケズリ。	礫多	酸化	赤橙色	覆土
5	須恵環	3.6 11.6 6.0	右ヨクロ整形。回転糸切り無調整。	黒色鉱物粒 含む	還元硬質	青灰色	覆土
6	須恵環	4.0 12.2 6.0	右ヨクロ整形。回転糸切り無調整。	礫多	還元やや軟質	褐灰色	覆土
7	須恵環	3.5 12.8 7.8	ヨクロ整形。回転糸切り無調整。	黒色鉱物粒 含む	還元硬質	灰色	覆土
8	須恵環	4.6 11.6 6.8	右ヨクロ整形。回転糸切り無調整。	砂粒若干	還元軟質	灰白色	覆土
9	須恵環	2.2 13.4 9.9	ヨクロ整形後、外面体部下端回転ヘラケズリ。底部全面回転ヘラケズリ。	砂粒やや多	硬質還元	灰色	覆土
10	須恵環	4.1 13.8 8.0	右ヨクロ整形。回転糸切り無調整。	礫多	還元やや軟質	灰色～黑色	覆土
11	須恵環	3.3 14.4 8.0	右ヨクロ整形。回転ヘラケズリ後、定方向の手持ちヘラケズリ。	黒色鉱物粒	還元硬質	灰色～紫灰色	覆土
12	須恵環	3.5 13.1 8.0	ヨクロ整形。回転ヘラケズリ。	砂礫少	還元硬質	明灰色	覆土
13	須恵環	4.8 11.2 7.8	右ヨクロ整形。回転ヘラカチ。	礫多	還元硬質	明灰色	覆土
14	須恵環	5.1 13.2 6.5	ヨクロ整形。回転糸切り。	黒色鉱物粒	還元硬質	灰色	覆土
15	須恵高台 环	8.3 19.2 11.2	ヨクロ整形。回転糸切り。	黒色鉱物粒	還元硬質	灰色	覆土
16	須恵蓋	2.3 7.3 —	右ヨクロ整形。天井部回転ヘラケズリ。	黒色鉱物粒	還元硬質	灰色	覆土
17	須恵蓋	3.2 14.4 —	右ヨクロ整形。天井部回転ヘラケズリ。	礫多	還元硬質	明灰色	覆土

表23 15号土塙出土遺物

番号	器種	器高(口径) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	灰陶瓶	4.6 14.6 7.0	ロクロ整形。体部下端に回転ヘラケズリ。つけ口け。	灰色地	還元硬質	灰白色	覆土
2	須恵环	5.9 13.4 6.8	右ロクロ整形。回転糸切り。	縦少	還元軟質	黒灰色	覆土

表24 16号土塙出土遺物

番号	器種	器高(口径) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師壺	4.4 14.0 —	口縁部から内面にヨコナデ。体部外に定方向のケズリ。	赤色顕化物 含む。	酸化	明赤橙	覆土

表25 36号土塙出土遺物

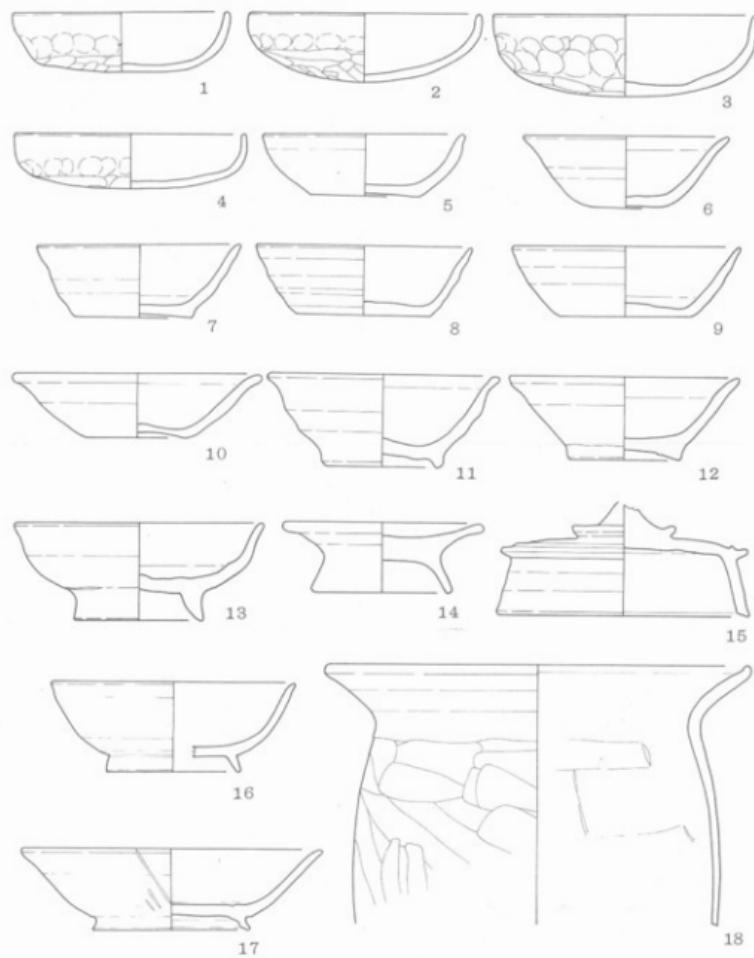
番号	器種	器高(口径) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師壺	3.3 15.4 —	口縁部から内面にヨコナデ。体部外に定方向のケズリ。	砂礫多	酸化	にぶい赤橙色	覆土

表26 39号C土塙出土遺物

番号	器種	器高(口径) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵蓋	3.0 17.6 —	右ロクロ整形。天井部外面回転ヘラケズリ。天井部内面に不定方向のナデ。	縦	還元硬質	明灰色	覆土

表27 39号D土塙出土遺物

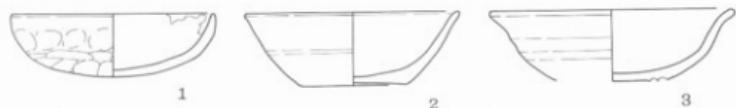
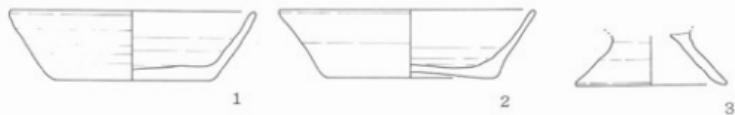
番号	器種	器高(口径) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵蓋	2.5 15.2 —	右ロクロ整形。天井部回転ヘラケズリ。かえしは折り返し。	縦多	還元軟質	灰褐色	覆土
2	須恵环	2.7 14.0 —	右ロクロ整形。体部下端ケズリ。底部手もちヘラケズリ。	縦多	還元硬質	明灰色	覆土
3	土師壺	3.7 12.2 —	口縁部から内面にヨコナデ。体部に不定方向のケズリ。	赤色顕化物 含む。	酸化	にぶい赤橙色	覆土
4	須恵蓋	— 12.0 —	ロクロ整形。内面同心円當て目。外面平行印目。	縦、黑色顕化物含む。	還元硬質	灰白色	覆土



39号土塙群周辺

第36図 土塙出土遺物（3）

0 10cm



50号土塙

第37図 土塙出土遺物(4)

0 10cm

表28 39号G土塙出土遺物

番号	器種	器高(口径cm底径)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師高台壺	4.3 15.2	ロクロ整形。切り離し不明。	赤色酸化物少	酸化	にぶい赤褐色	覆土

表29 39号H土塙出土遺物

番号	器種	器高(口径cm底径)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師高台壺	3.8 11.0 6.4	右ロクロ整形。切り離し不明。	繊少	酸化	にぶい褐色	覆土

39号土塙群は各土塙より遺物の出土が認められるが、これら土塙の周辺および上部には数多くの遺物が検出されている。そして、これらの遺物は土塙内より出土した遺物と同時期のために本土塙群と深い関係をもつと考え、本項で取り扱う。

表30 39号土塙周辺部遺物

番号	器種	器高(口径cm底径)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師壺	3.2 11.6 —	ロ縁部から内面にロコナゲ。体部外面の指頭による押え。底部内方不定方向のケズリ、外方同心円状のケズリ。	砂礫多	酸化	明赤橙色	覆土
2	土師壺	3.7 12.2 —	ロ縁部から内面にロコナゲ。外周に同心円状のケズリ後、内方に方向のケズリ。	繊多	酸化	赤橙色	覆土
3	土師壺	4.4 14.2 —	ロ縁部から内面にロコナゲ。体部に指頭により押えを行なう。底部にケズリ。	砂礫多	酸化	明赤橙色	覆土
4	土師壺	3.0 12.4 —	ロ縁部から内面にロコナゲ。体部に指頭により押えを施す。底部にケズリ。	砂礫多	酸化	赤橙色	覆土
5	土師壺	3.4 11.0 6.0 —	ロクロ整形。回転糸切り無調整。	繊多	還元軟質	黒灰色	覆土
6	土師壺	3.9 11.0 4.0 —	ロクロ整形。回転糸切り無調整。	砂礫、赤色 酸化物少	酸化	浅黄橙色	覆土
7	須恵壺	4.0 10.9 5.3 —	ロクロ整形。回転糸切り無調整。	繊	還元軟質	黒褐色	覆土
8	須恵壺	3.7 11.6 7.2 —	右ロクロ整形。回転ヘラケズリ。体部下端回転ヘラケズリ。	黑色鉱物粒有	還元軟質	灰白色	火ぶくれ有、 覆土
9	須恵壺	3.8 12.0 7.0 —	右ロクロ整形。回転ヘタ切り後、全面ヘタケズリ。	黑色鉱物粒有	還元軟質	明灰色	覆土

表30のつづき

番号	器種	器高～ 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	須恵環	3.4 13.0 5.6	ロクロ整形。回転糸切り無調整。	疊多	還元軟質	灰色	覆土
11	須恵環	5.0 12.2 6.0	右ロクロ整形。回転糸切り。	砂礫含む	還元軟質	暗褐色～灰 灰色	覆土
12	土師环	4.5 12.4 6.0	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	赤色酸化物	酸化	にじい黄 褐色	覆土
13	土師环	5.3 13.2 6.8	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	疊多	酸化	にじい赤褐色 ～灰赤褐色	覆土
14	土師高台皿	3.8 10.5 7.4	右ロクロ整形。切り離し不明。	疊少	酸化	暗褐色	覆土
15	須恵蓋	6.1 13.6	ロクロ整形。	黒色鉱物粒	還元硬質	灰色	覆土
16	縁鉢壇	4.8 13.0 7.2	ロクロ整形。見込みと底部にトサン痕を残す。切り離し不明。底縁部を全面に削毛なり。	灰褐色地	還元硬質	濃褐色	覆土
17	縁鉢壇	4.4 16.0 8.8	ロクロ整形。見込みに沈線。体部外面部下に3条の暗文。全面に濃褐色釉を剥げなり。回転糸切り。見込みと底部にトサン痕有す。	灰色地	還元軟質	濃褐色	覆土
18	土師蓋	14.0 — —	口縁部ロコナデ。側面内面へラナデ。側面外面上端を右から左へのケズリ後、右下から左下へのケズリを施す。	砂粒多	酸化	赤褐色	覆土

表31 40号土塙出土遺物

番号	器種	器高～ 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師壇	3.6 13.4	口縁部から内面にロコナデ。体部から底部にかけて定方向のケズリ。	疊	酸化	明赤褐色	覆土
2	須恵蓋	2.8 14.0	右ロクロ整形。天井部回転ヘラケズリ。	黒色鉱物粒	還元硬質	紫灰色	覆土
3	須恵壇	— — 6.6	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	疊少	還元硬質	灰色	覆土

表32 42号土塙出土遺物

番号	器種	器高～ 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵環	3.8 13.0 8.4	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	疊少	還元やや硬質	灰白色	覆土
2	須恵環	3.6 13.9 9.2	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	疊多	半還元硬質	赤紫灰色	覆土
3	土師器脚	— — 8.1	ロコナデ。	疊多	酸化	明赤褐色	覆土

表33 50号土塙出土遺物

番号	器種	器高 口径 底径 cm cm cm	皮・縫形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師壺	3.4 11.0 —	口縁部から内面にヨコナデ。体部外面に定方向のケズリ。	硬	酸化	明赤褐色	覆土
2	頬窓	2.8 14.0 —	右クロ彫形。天井部回転ヘラケズリ。	黒色鉄物粒含む	還元軟質	紫灰色	覆土
3	頬窓环	3.9 13.0 —	ニクロ彫形。回転糸切り。	硬、赤色酸化物少	還元軟質	灰白色	覆土
4	頬窓环	5.4 13.8 6.2	ニクロ彫形。回転糸切り無調整。	赤色酸化物少	還元軟質	灰白色	覆土
5	頬窓环	5.5 15.0 7.4	右ニクロ彫形。回転糸切り無調整。	赤色酸化物少	還元軟質	灰白色	覆土
6	土陶高台环	4.9 13.2 6.8	ニクロ彫形。糸切り無調整。	硬多	酸化	黒褐色	覆土
7	灰釉皿	3.1 15.4 7.8	ニクロ彫形。底部回転ヘラケズリ。重ね焼き。白色釉のつけかけ。	灰白地	還元	灰白色	覆土

溝

1号溝（第38図）

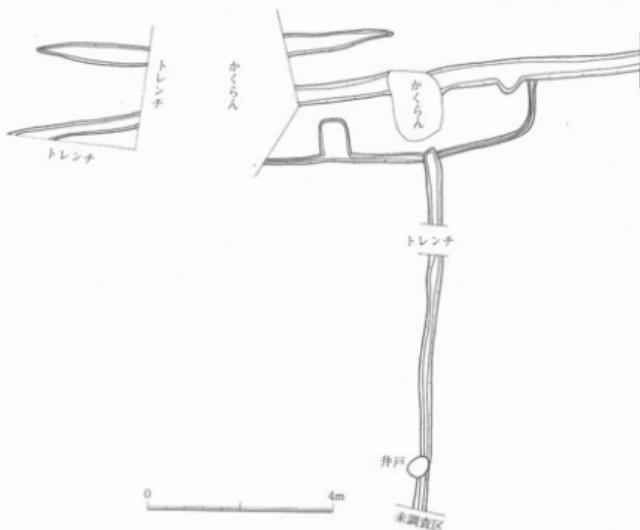
本溝は調査区中央部を東西に走向しており、F-1～8区にまたがる。確認面はC・FP軽石を含む黒色土層で、覆土は浅間山B軸石層を含む褐色土層である。形状は幅100cmの逆台形状を呈す。深さは西端が最も深く、確認面より37cm程度で底面に至り、東に向うに従い浅くなり、東端で確認面より4cm程度で底面となる。また、本溝は東部北側において2号溝と接続している。遺物は流れ込みと考えられる細片が少量出土したのみである。

2号溝（第38図）

本溝は調査区西半部中央を東西に走向しており、F-2～3、D-3～5区にまたがる。確認面はC・FP軽石を含む黒色土で、覆土は浅間山B軽石の純層である。本溝は第1号溝より分枝しており、第1号溝から約2m北側で東方向に折れ曲がって第1号溝と平行して走向する。また、本溝は第3号溝とも接続している。断面形状は深さ5cm程度のU字形を呈す。深さは第1号溝同様に西に向うほど深くなる傾向が認められる。遺物の出土は皆無である。

3号溝（第38図）

本溝は調査区北西部を南北に走向しており、B～D-4区、E-3区にまたがる。確認面はC・FP軽石を含む黒色土で、覆土は浅間山B軽石を多く含む褐色土である。本溝は2号溝と接続しているが、同時点で使用されたかは不明である。また、北部において第1号井戸址により切られている。形状は深さ30～40cmのV字形を呈している。溝底はほぼ同一レベルであるが、南端において急な角度をもって立ち上がり、第1号溝の南部に若干突出する。遺物は全て流れ込みと考えられ、細片に限定される。



第38図 1~3・5号溝

4号溝 (39図)

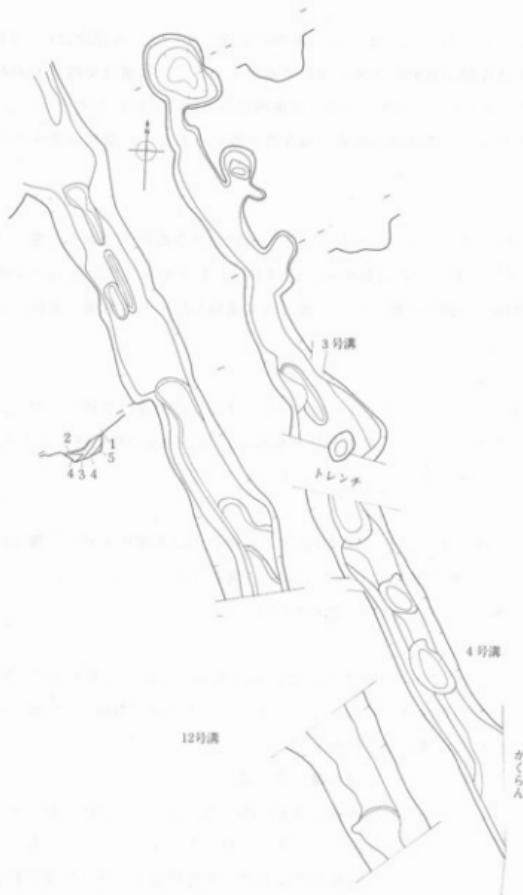
本溝は調査区西半部のB-2、B-D-3、D-F-4、F-I-5、H-I-6、I-7の各区にまたがり走向する。南部において第8・10号溝と関係をもつが、その新旧関係等は不明である。確認面は北部が黒色粘質土、中部が灰褐色粘質土、南部が茶褐色土となる。断面の形状はU字形を呈しており、溝底の標高は南部ほど低くなる。本溝は若干の蛇行が認められ、北端では数ヶ所の土塹が存在し、その最北端の土塹で溝は終結している。土塹の性格であるが、溝覆土に砂等が含まれ、明らかに水流が存在したことが想定され、また土塹より北部に溝の統きが存在しないことより本土塹は湧水点もしくは溜井の性格を有していたと考えられる。

5号溝 (第39図)

本溝は調査区中央部のG-4~8区の各区にまたがり走向する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土で、浅間山B軽石を多く含む褐色土である。断面形状は深さ6cmの皿形を呈している。なお、本溝はさらに東西に延びていたと考えられるが、ともに削平され消失している。

6号溝 (第40図)

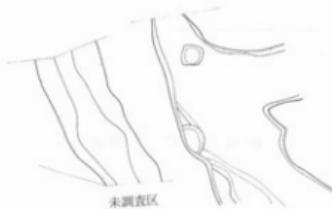
本溝は調査区東部のC-E-8区の各区にまたがり南北に走向する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土で、覆土は浅間山B軽石を多く含む黒褐色土である。断面形状は深さ3cmの皿状を成している。溝底のレベルは南へ向って下がる。



12号溝土層説明

- 1 薄褐色土 C軽石・FP若干、酸化鉄多、粘性やや有り、締り良。
- 2 薄褐色土 砂少、酸化鉄多、粘性悪く、締り良。
- 3 暗褐色土 C軽石・FP若干、砂若干、粘性良、締り良。
- 4 暗褐色土 C軽石・FP若干、砂多、粘性やや悪く、締り良。
- 5 暗褐色土 4層と同じだが、砂が少ない。

0 4m



第39図 4・12号溝

7号溝（第40図）

調査区北東部のD-9~11、C-10~12にまたがり東西に走向している。確認面はC・FP軽石を含む黒色土層で、覆土は浅間山B軽石を多く含む黒褐色土である。本溝は東端が未調査区に、西端がすでに削平を受け消失しているが、かつては東西に長く延びていたと考えられる。断面形状は深さ20cmのU字形を呈し、溝底は高低差の偏在性が認められない。遺物は細片のみに限定される。

8号溝（第41図）

調査区南東部のH-6~9区の各区にまたがり存在する。確認面は茶褐色土である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。断面形状は幅90cm、深さ40cmのU字形を呈す。走向は東西となっており、また西部で溝幅が一時的に細くなつて後、再度溝幅が広がり4号溝に接続している。

9号溝（第41図）

調査区南東部のI-7、H-8・9区の各区にまたがり存在する。確認面は茶褐色土層である。覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。断面形状は幅80cm、深さ50cmのU字溝を呈す。走向は東西となっている。また、8号溝および10号溝と平行している。

10号溝（第41図）

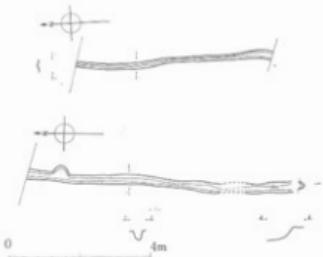
調査区南東部のI-7~9、H-10区にまたがり存在する。確認面は茶褐色土層で、覆土はC・FP軽石を含む黒色土である。断面形状は台形を呈して、溝底は西へ向うにしたがいレベルが低くなる。西端で第1号溝と接するが、その関係は不明である。

11号溝（第41図）

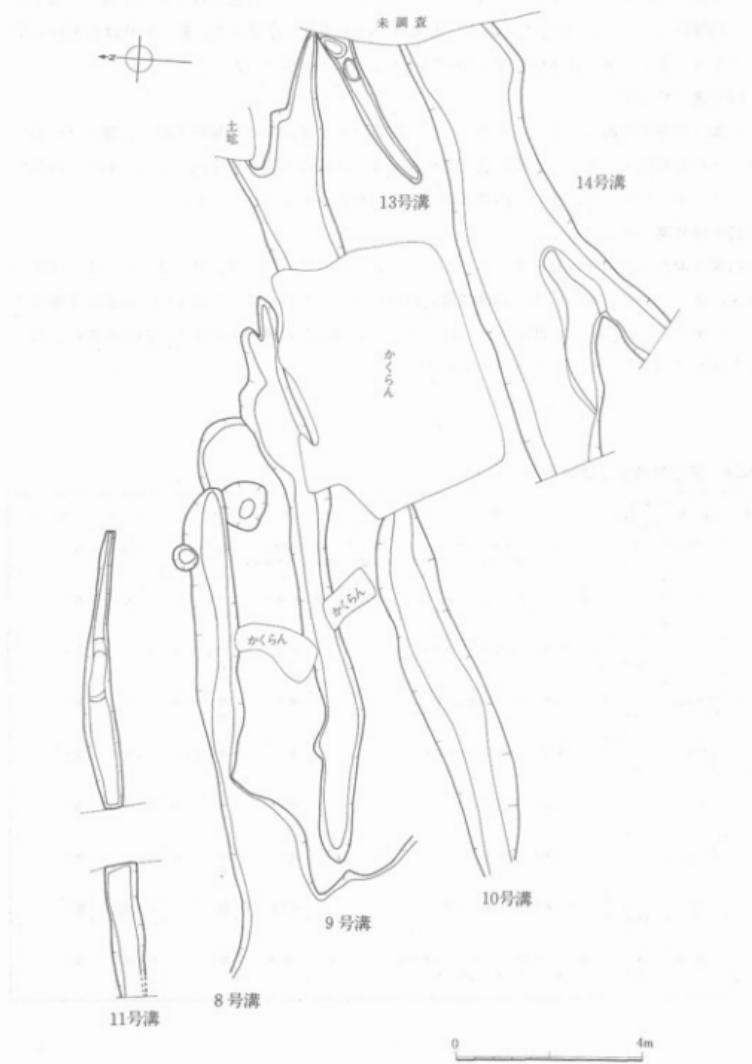
調査区東南部のG-6~8区にまたがり存在する。確認面は茶褐色土層で、覆土はC・FP軽石を多く含む黒色土である。断面形状はU字形を呈す。また、底面は厚さ数mmの炭層により覆われていた。覆土中には形を成す遺物は多数出土している。

12号溝（第39図）

本溝は調査区西半部のA~D-2区、D~F-3区、G-4区、H~I-5区にまたがり存在する。確認面は北部で黒色粘質土、他が灰褐色粘質土である。覆土は砂を多量に含む灰褐色粘質土の単層である。断面形状は逆台形を呈している。溝底は凹凸が激しく、また南部ほどレベルが低くなる傾向が存在する。また、本溝は4号溝と平行して走向している。性格は水利を目的とした溝と考えられる。



第40図 6・7号溝



第41図 8・9・10・11・13・14号溝

13号溝（第41図）

本溝は調査区東南部のI-10、H-11区の各区にまたがる。確認面は茶褐色土層で、覆土はC・FP軽石を多く含む黒色土である。本溝西方は未調査区に延びる。断面形状は台形状を呈しており、また北部では溝底に深さ10~20cmの小ピットが認められる。

14号溝（第41図）

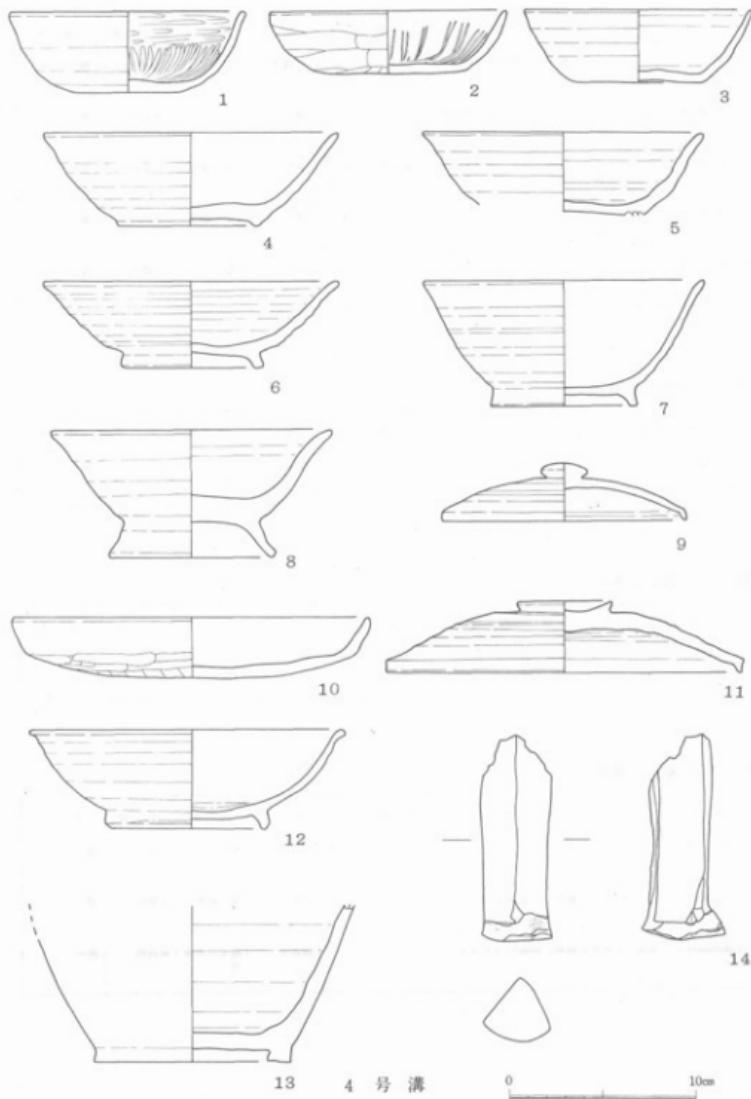
本溝は調査区東南部のI・J-9~11区に位置する。確認面は茶褐色土層で、覆土は軽石を多く含む暗褐色土である。断面形状は台形を呈す。走向は北東から南西となっており、西部において二又に分かれている。また、西部は第12号住居址により切られている。

15・16号溝（第4図）

両溝は調査区西南部のD-1~2、E-2、F-2、G-2~3、H-2~3、I-3区の各区にまたがり存在している。両溝は確認段階において存在が認められたが、調査を実施するとその掘り込みはほとんど認められなかった。この点より両溝ともにすでに削平を受け、最下面を残して消失してしまったと考えられる。

表34 第4号溝出土遺物

番号	器種	器高~口径(cm) 底径	成・整 形 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1	土 筋 环	4.3 12.6 5.4	ロクロ整形。外面部下端回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。内面は見込み部を放射状に口縁部を儀位にヘリカキ。	砂礫多 赤色酸化物	酸化	明赤褐色	覆土
2	土 筋 环	3.3 12.6 —	口縁部から内面にヨコナデ後、内面に放射状の暗文様部に左から右へのケズリ。底部は定方向のケズリ。	砂礫多	酸化	明赤褐色	覆土
3	須 悪 环	3.9 12.2 7.0	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	砂粒	還元や軟質	灰色	覆土
4	須 悪 高 台 环	5.0 15.6 7.8	ロクロ整形。底部切り離し不明。	礫少	還元や軟質	灰白色	覆土
5	須 悪 高 台 环	4.2 15.0 —	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	礫少	還元硬質	赤紫灰色	覆土
6	須 悪 高 台 环	4.7 15.7 7.4	右ロクロ整形。回転糸切り。	礫少	還元や硬質	明灰色	覆土
7	須 悪 高 台 环	11.8 15.0 7.8	右ロクロ整形。回転糸切り。	礫少	還元や硬質	灰色	覆土
8	土 筋 环	6.9 15.0 8.6	右ロクロ整形。切り離し不明。	赤色酸化物	酸化	明赤褐色	覆土
9	土 筋 盆	3.2 19.0	ロ縁部から内面にヨコナデ。体部内外方に定方向のケズリ後、外周に同心円状のケズリ。	砂粒多	酸化	明赤褐色	覆土



第42図 溝出土遺物(1)

表34の続き

番号	器種	器高～ 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	須恵蓋	3.1 13.2	ロクロ整形。天井部外面回転ヘラケズリ。	砂礫多	酸化	明褐色 内黒	覆土
11	須恵蓋	3.8 19.0 —	右ロクロ整形。天井部外面回転ヘラケズリ。	礫		灰白色	覆土
12	灰釉壺	5.3 17.2 8.6	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。重ね焼き。渋緑色 釉ハケズリ。	砂粒若干	還元硬質	渋緑色	覆土
13	須恵瓶	— — 10.4	ロクロ整形。	礫多	還元硬質	灰色	覆土
14	獸脚	— — —	ケズリ。	砂粒多	酸化	赤橙色	覆土

表35 5号溝出土遺物

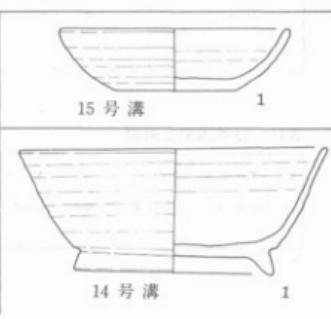
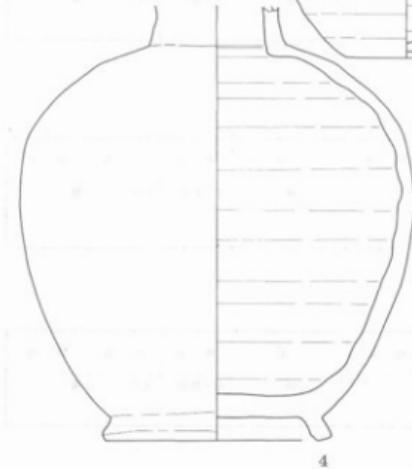
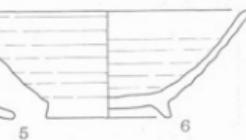
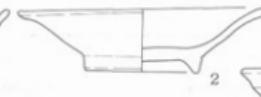
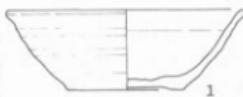
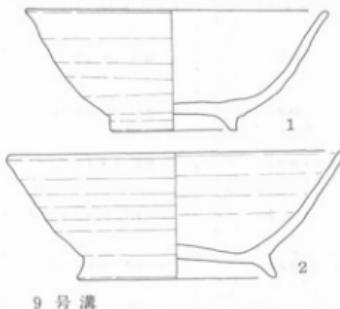
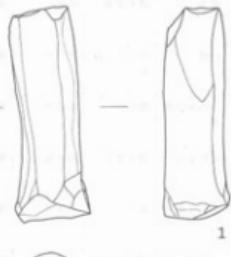
番号	器種	器高～ 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵高台 皿	2.3 12.0 5.4	ロクロ整形。回転糸切り。	礫少	還元やや軟質	灰白	覆土

表36 7号溝出土遺物

番号	器種	器高～ 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵高台 皿	2.3 12.0 5.4	ロクロ整形。回転糸切り。	礫少	還元やや軟質	灰白色	覆土

表37 8号溝出土遺物

番号	器種	器高～ 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	獸脚	— —	上から下へのケズリ。	砂粒多	酸化	赤褐色	覆土
2	須恵高台 环	6.7 15.6 6.4	ロクロ整形。回転糸切り。	砂粒	還元軟質	灰褐色から 灰白色	覆土
3	須恵高台 环	6.8 17.8 10.4	ロクロ整形。回転ヘラケズリ。	礫若干	還元や軟質	灰白色	覆土



第43図 溝出土遺物(2)

0 10cm

表38 11号溝出土遺物

番号	器種	器高 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵環	4.3 12.8 6.3	回転糸切り無調整。右ロクロ整形。	硬多	還元硬質	灰色	覆土
2	須恵高台皿	3.6 13.4 6.6	ロクロ整形。回転糸切り。	砂礫	還元やや硬質	灰白色	覆土
3	土師高台皿	2.7 13.5 7.0	ロクロ整形。回転糸切り。	赤色酸化物 多	酸化	赤褐色	覆土
4	須恵高台皿	3.6 13.8 7.2	ロクロ整形。回転糸切り。	砂粒混入	還元軟質	明灰褐色	覆土
5	須恵蓋	3.0 15.0	右ロクロ整形。外面天井部回転ヘラケズリ。	黑色鉱物粒	還元	暗灰色	覆土
6	須恵高台环	5.7 15.0 6.6	右ロクロ整形。回転糸切り。	赤色酸化物	還元やや軟質	灰褐色	覆土

表39 12号溝出土遺物

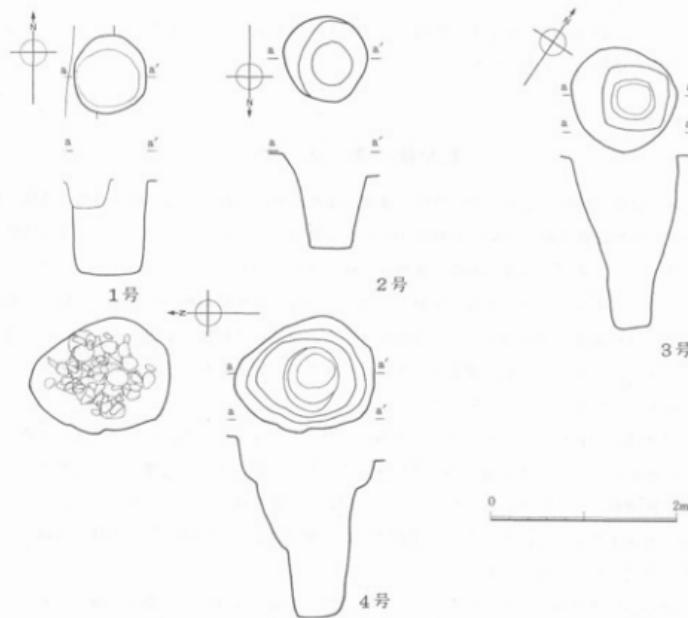
番号	器種	器高 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵環	3.8 12.1 6.1	ロクロ整形。回転糸切り無調整。	黑色鉱物粒	還元	青紫灰	覆土
2	土師環	3.2 12.5 4.8	ロクロ整形。回転糸切り無調整。	赤色酸化物	酸化	黄褐色	覆土
3	須恵環	3.9 12.2 6.1	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	黑色鉱物粒	還元硬質	灰色	覆土
4	須恵長颈甌	— — 12.0	ロクロ整形。	硬少	還元硬質	灰色	覆土

表40 14号溝出土遺物

番号	器種	器高 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵高台环	6.9 16.5 10.7	右ロクロ整形。回転糸切り。	硬	還元軟質	灰色	覆土

表41 15号溝出土遺物

番号	器種	器高 口径(cm) 底径	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵環	3.3 12.2 6.5	右ロクロ整形。回転糸切り無調整。	硬	還元軟質	灰白	覆土



第44図 1・2・3・4号井戸址

井 戸 址

1号井戸址（第44図）

本井戸址は調査区西部のB-4区に位置する。確認面は黒色粘質土で、覆土はB軽石を多く含む褐色土である。本址は3号溝を切っている。形状は径85cm、深さ103cmの筒状を呈す。

2号井戸址（第44図）

本址は調査区D-7区に位置する。確認面は第2号住居址覆土上面である。覆土はB軽石を多く含む褐色土である。形状は径90cm、深さ100cmの筒形を呈す。

3号井戸址（第44図）

本址は調査区G-9区に位置する。確認面は第14号住居址覆土上面である。覆土はB軽石を多く含む褐色土である。平面形は上部において径110cmの円形を呈、下位において1辺60cmの方形となり、底面が1辺40cmの不整方形となる。

4号井戸址（第44図）

本址は調査区E-10区に位置する。確認面はC・FP軽石を含む黒色土である。覆土はB軽

石を多く含む褐色土である。形状は上面において長軸長152cm×短軸長120cmの卵形を呈し、底面においては径40cmの円形を呈す。断面形状は本来筒形を呈していたと考えられるが、上部は崩壊して壁面が傾斜したと考えられる。

第5章 まとめ

本遺跡では縄文時代と奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されている。縄文時代は遺構の検出が無く、遺物は縄文時代中期加曾利E式細片が少量出土したにすぎない。奈良・平安時代では住居址、土塙、井戸、溝等の多様な遺構群が検出されている。

住居址は全て東壁にカマドを有す小形なもので、内部の諸施設が無い例が多い。時期は底部が回転糸切り無調整の須恵器坏を伴う事例が多いことより9世紀代が主体を成していると考えられる。また、住居址の分布は調査区の北東部に片寄りが認められ、さらに第4号溝を境としてその西側に住居址の存在は皆無である。

土塙は多様な形状を有し、その多くが重複し、群在している。分布は住居址同様に調査区の北東部に偏在しており、4号溝の西側は皆無と言える。時期は底部切り離し後再調整される須恵器坏や無調整の須恵器坏の存在から8～9世紀代が主体を成していると考えられ、さらに住居址群の形成よりも古い段階で形成が開始されたと推定される。性格はその形状が多様で一定の目的に限定されたと考えられない。

溝は時期的に2時期に大別できる。ひとつは浅間山B軽石を多く含む覆土の溝とそれよりも古く、住居址や土塙と同時期の溝に分かれる。前者は1～3・5～7号溝で、その性格は不明である。後者は4・8～16号溝である。この内、4・12号溝は覆土中に砂が含まれることより水流が存在したことが考えられる。また、4号溝はその北端に湧水点が存在しており溜井と想定できる。12号溝もまた、4号溝と平行して走向することより北端に湧水点を有していた可能性をもっている。8～11、13号溝は水流の存在が否定的で、その性格は不明である。15・16号溝は痕跡しか検出されず性格不明である。

井戸址は他の全ての遺構よりも新しく、これに伴う他の遺構は検出できなかった。

以上、本遺跡の概要を記したが、本遺跡では奈良・平安時代を中心として様々な土地の利用が行なわれていることが明らかとなり、国府城周辺の様相を知るのに重要な遺跡と言える。

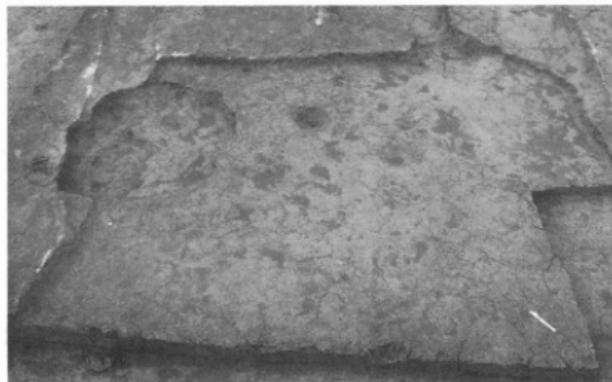
写 真 図 版



1. 14号住居址

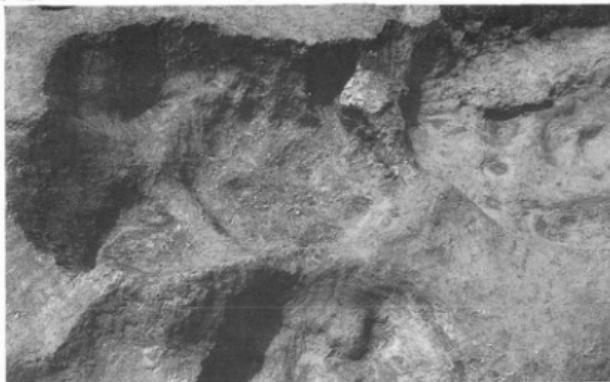


2. 12号住居址



3. 9号住居址

図版2



1. 39号土塙群
北部(南より)



2. 39号土塙群
東部



3. 39号土塙群
北部

図版 3



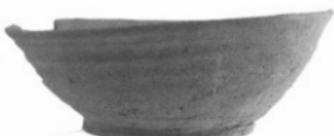
4号住-5



4号住-4



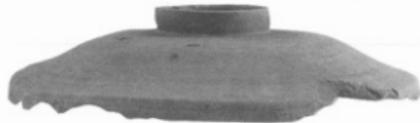
8号住-4



6号住-3



8号住-3



5号住-5



8号住-8



8号住-9

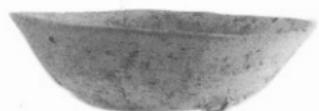


8号住-10



15号住-2

図版 4



14号住-7



14号土塙-7



14号土塙-5



39号C 土塙-1



39号土塙周辺-15



4号溝-14



8号溝-1



12号溝-4

群馬県前橋市堰越遺跡
発掘調査報告書

昭和63年3月20日

発 行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編 集 前橋市教育委員会
印 刷 山武考古学研究所
協 文 化 総 合 企 画
TEL. 0476 (24) 1563

